

二〇二三年度 第四回

泥流地帯

作文コンクール
応募作品集

主催 『泥流地帯』映画化を進める会
協力 三浦綾子記念文学館
上富良野町教育委員会



二〇二三年度

第四回 泥流地帯作文コンクール作品集

募集期間 二〇二三年六月～九月

応募資格 特になし

応募作品数 32作品(うち7作品は短文投稿の部)

△選考委員▽

三浦綾子記念文学館 館長 田中 綾

上富良野町教育委員会 教育長 鈴木 真弓

上富良野町郷土をさぐる会 北向 一博

上富良野町図書館ふれんど「みんなの読書会」 主宰 大道 千アキ

(選考委員長)『泥流地帯』映画化を進める会 会長 青野 範子

主権 協力

『泥流地帯』映画化を進める会
三浦綾子記念文学館
上富良野町教育委員会



目 次

△はじめに▽	1
△優秀作品選考審査結果▽	2
△一般の部▽	
■ 泥流地帯の好きなフレーズ6選 / (P.N) 神楽岡 マイ	4
■ 泥流地帯に思う / 浦川 裕子	5
■ 書き留めた言葉 / (P.N) MIHO	6
■ 溢れるばかりの愛 / 山田 千晴	7
■ 続泥流地帯その後 / 細谷 裕士	10
■ 教師・三浦綾子に学ぶ「教育の本質」とは / (P.N) 姫川 正宗	11
■ 青き礎 / (P.N) すい	15
■ 小菊 / (P.N) ちやちやとGPT	25
■ 被災は因果応報なのか / (P.N) あめさかつ	27
■ 雲の切れ間から / (P.N) 天音	28
■ のこされた人 / (P.N) ニモ	29
■ 「泥流地帯」は時代を超えて	
(三浦綾子さんからのメッセージ) / 松野 富子	35
■ 流る、とまる、まもる、動く——三重団体泥流体験者子孫の 小さな個人的記し / (P.N) 佐々木戸桃	38
■ リアリズムの作家 / (P.N) あらい ゆう	39
△児童生徒の部▽	
■ 泥流地帯のキャスト考えてみた / (P.N) 松島 ボムギユ	41
■ 運命の歯車 / (P.N) 幸輝	41
■ 映像化について / (P.N) ㄣㄣ	42
■ 富報われないので転生させた。 / (P.N) 羽羅良	43
■ 最低な男達と最高な男 / (P.N) じえっじえ	43
■ 泥流地帯と心の負の部分 / (P.N) 拳出 なぐる	43
■ 三年越しの告白 / (P.N) さそり座の女	44
■ 福子 / (P.N) ひよ(ﾟ)ﾟ(ﾟ)ﾟ	45
■ 続・泥流地帯 / (P.N) バズライトイヤアのペットのジョンの友達	45
■ 耕作と節子がつないだ命 / (P.N) りくううう	46
■ 主要登場人物について / (P.N) みったん	46
△つづやきの部▽	
△資料編 史実としての『泥流地帯』▽	48

■はじめに

『泥流地帯』作文コンクールは新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた二〇二〇年、自宅で過ごす機会が多くなつたことを機に三浦文学、特に現在上富良野町が実写映画化に取り組んでいる『泥流地帯』『続泥流地帯』の原作小説を多くの人に読んでいただけることに期待を込めて企画がスタートしました。

児童生徒の皆さんはもちろん、「大人の作文」も楽しんでいただくため、対象年齢や文字数、内容に関する制約を一切取り払い何でもアリの募集を行った結果、過去三回の開催でいずれも予想を大きく上回る数の応募をいただいています。四回目となる今回も、全国から短文投稿の部を含め35編のご応募をいただいたところです。

どの応募作品も三浦文学愛、泥流地帯愛にあふれ、さまざまな視点から深くていねいに読み解かれたものばかり。読者同士で互いの理解を深めること、また『泥流地帯』を未読の方にも本を手にとる大きなきっかけになるのではないか、との期待から、ご応募いただいた皆様のご理解とご協力のもと、例年どおり作品集発刊のはこびとなりました。

実写映画化を間近に控えた今、本作品集が原作小説『泥流地帯』『続泥流地帯』をお読みいただく、または再読いただく機会となることを心から願っています。

■実写映画化プロジェクト

小説『泥流地帯』『続泥流地帯』の舞台となった上富良野町では現在、実写映画化のプロジェクトとして官民連携した取り組みが進められています。

実写版『泥流地帯』は民間事業者による全国公開の興行作品として製作される一方で、ふるさと納税により企業・個人から広く資金を募っています。

映画本編エンドロールにご寄附いただいた皆様のお名前を掲載するほか、エキストラ出演やイベント参加特典などをご用意しています。皆さんも映画作りに参画してみませんか？

三浦綾子
泥流地帯
実写映画化プロジェクト

みんなで、撮影る
みんなで、出演る

——百年先のために——
青白い炎が灼く死の土地へに
再び靴を履くつた上富良野の開拓者
先人が譲り遺してくれた
美しく豊かな故郷の物語を
全国のスクリーンへ

北海道 上富良野町 / (協力) 三浦綾子記念文学館

「泥流地帯」映画化を進める会 / ロケサポートかみふらの
〈事務局〉上富良野町役場企画課 工祝光謙 (071-076) 北海道空知支庁上富良野町大字7丁目2-11
☎ 0167-45-6983 ✉ deiryu@movie-kamifurano.com

ふるさと納税で
もらえる！
泥流地帯文庫型
スマホケース
※各機種対応

公式Xで
情報発信中

映画化
プロジェクト
webページ

優秀作品選考結果



最優秀賞 のこされた人 (P.N) ニモ

【選評】▽原作ではほんの少ししか登場しない坂森五郎の兄・四郎の存在をクローズアップさせ、その着眼点が何より目新しい。五郎の死について、耕作は自身の責任を感じ、一生その死を背負ってゆくはず。その耕作の悲しみを共有しうる、四郎という人物を創り出した点に、格別なやさしさが感じられた。また、髪結いの修業をしていた佐枝の技術をお披露目する場を与え、登場人物の長所を引き出した点も魅力的であった▽小説「泥流地帯」の登場人物、泥流に遭遇して死んだ坂森五郎の兄「四郎」を主人公にして、生前の「五郎」とその時々を追憶する作文。一人称形式で独立性が高い小説作品▽耕作のもとを訪れようとして、被災し亡くなった坂森五郎の兄四郎という視点が新鮮。その心情と葛藤が瑞々しく描かれ、あまり本文中に登場しない母、佐枝の人となりもよく理解されていると感じた。読んでいてとても引き込まれる作品

優秀賞 溢れるばかりの愛 山田 千晴

【選評】▽小説中にちりばめられた「感情の醜悪と感動」の裏に込められた、筆者「三浦綾子」の愛と人生観に感想を述べている。小説「泥流地帯」を読んでみたいというモチベーションが高まる▽全体的にとってもよくまとまっており、よく作品を読み込まれていて登場人物への理解の深さが感じられる。三浦綾子作品全体への愛をとて感じられる作品

優秀賞 青き礎 (P.N) すい

【選評】▽時折登場する、青の()付きの心内語がユニーク。馬目線という、人外のものからの発語を取り入れる発想が、他の作品とは一線を画していた。馬目線を媒介に人間関係の新たな側面を浮かび上がらせ、ドラマチックに仕立てた意欲作▽農耕馬「青」からの視点で描かれる新たな作品の誕生▽「泥流地帯」を舞台に、この中に描かれている農耕馬「青」をプロンプターとして、いわゆる「吾輩ネコ型」創作小説となっており完成度は高い。作中に出てくる「あんずの木」と「柿」は要考証

佳作 教師・三浦綾子に学ぶ「教育の本質」とは

(P.N) 姫川 正宗

【選評】▽教育者・三浦綾子に着目、昭和十年代の綾子と現代の子供たちとを比較検討。事務職員としての生徒たちのかかわりは、著者にしか描けない臨場感があり、リアティーのある内容である。今日の教育現場に対する鋭利な批評精神も参考になる▽小学校の事務職員として働く自分と、一時教員として軍国教育に係わった三浦綾子、小説中に登場する教師になった耕作について、時代と世相の違いを加味しながら、「教育のあり方」「教育を担う者役割」を考察している。示唆深い意見が散見している

佳作 流る、とまる、まもる、動く

―三重団体泥流体験者子孫の小さな個人的記し

(P.N) 佐々木戸桃

【選評】▽泥流に遭遇した開拓者の子孫の方からの投稿で、語り継がれた開拓生活や泥流災害の様子と、小説「泥流地帯」を重ね合わせて書かれている。小説の内容よりも、親族からの直接の伝聞に悲惨さと生へのたくましが伺える▽泥流災害を体験した祖母のお話。上富良野町開拓記念館には被災者が描いた絵画があり、その恐怖はいかばかりか



最優秀賞 運命の歯車 (P.N) 幸輝 (上富良野高)

【選評】▽冒頭の一行「私はいつも一人だった」は、深城節子が物心ついてから抱いた心情を端的にとらえており、登場人物の内面を理解しようという心配りがうかがえます。『泥流地帯』の「山合の秋」の内容、人物関係ともにきちんと読み取れています。▽登場人物「深城節子」として、一人称形式で書かれた追想創作文。小説に書かれた1シーンをショートショート小説に仕立てている▽確かに、節子が耕作を特別な異性として意識し始めたのはこのタイミングだったのかも、とハッとさせられました。鋭い視点だったと思います。

優秀賞 3年越しの告白

(P.N) さそり座の女 (上富良野高)

【選評】▽福子が、中学受験前の耕作に白い小石を手渡した部分などに注目し、年少時代からの拓一との三角関係に言及。『続泥流地帯』のラストでは、拓一と福子の行く末を明るく方向に描いていましたが、その後日談を自らの発想で物語に仕立てた想像力に感心しました▽拓一と耕作と福子の三人の心模様を描かれています▽耕作と福子が結ばれるという新しい展開。もし、二人が好き合っていたとしたら拓一は身を引いていただろうと想像できます。その後の拓一がとても気になりました

佳作 泥流地帯のキャスト考えてみた

(P.N) 松島 ボムギユ (上富良野高)

【選評】▽泥流地帯映画化に際しての俳優キャストを提案する文章で、小説登場人物を描き出す脚本を想定して俳優キャラクターをマッチングしています



最優秀賞 Tomomo @tomomo_journal

【選評】▽「泥流地帯」を生きた先人から現代を生きる投稿者に脈々と継がれる儚くも尊い「生」と、大自然の悠久の営みとの対比が美しいじぶやきです

一般の部

泥流地帯の好きなフレーズ6選

(ペンネーム) 神楽岡 マイ

三十年とは結構な期間ですよ。希望だけがあるわけではない毎日、市三郎や三重団体の人たちはどのような思いで過(こ)してきたんだろう。ただ「開拓してやる、成功してやる」といった根性的なものとは違う、芯の通った強い思いがあったのではないかと思えます。それが拓一・耕作兄弟に確実に受け継がれているなど感じました。

どんな作品でも心に残るシーンや、好きな言い

回しがあると思っています。

スラムダンクで言えば「あきらめたらそこで試合終了ですよ」(安西先生)とか、テニスの王子様で言えば「なるほどSUNDAYじゃねーの」(跡部景吾)とか。

ああ、これは「名台詞」の範疇ですね。違う違う。さて、数ある三浦綾子作品のなかでも、この『泥流地帯』、『続泥流地帯』の二作は特に心に残るフレーズが多いように思いましたので、今回はそれを紹介しようと思います。

『泥流地帯』 雪間(一)

「手伝ってやれ。苦労はみんな分けてねばだね。しかし、何だね、三重団体の人たちも頑張ったねえ」

正月を迎えるシーン。市三郎が開拓に入ってから十年ぶりの「いい年越し」と話す。はるばる三重県から上富良野に入植した人たちの労をねぎらう。その話を、拓一と耕作は真剣に聞く。

『泥流地帯』 煙(八)

「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生れ変わつたとしても、おれはやっぱり最初に生きるつもりだぞ」

この拓一の台詞は、かなり多くの人に響いているのではないでしょうか。普段の心掛けがよかったから云々という話は、現代で冗談として言うときはあるにせよ、生死をかけた場面で使っちゃいかんでしょ。

「まじめ」と言っても、私は消極的まじめさと積極的まじめさの二種類があると思っています。前者は「まじめにやっついていれば、文句は言われない。だからまじめにやる」という印象。周りから見ると「まじめに見えるけど、楽しいのかね?」と思われることがあるかもしれない。それに対し、後者は「まじめに生きることで、結果は良くも悪くもあとからついてくる」というもの。拓一の「まじめ」は圧倒的に後者だと思っています。これは、周りから見ても「筋が通っている」という印象があります。

当の拓一本人にしてみれば、周りからどう思われようが気にしないと思いますけど。

『続泥流地帯』 雪間(四)

「ぼくは、命をかけても復興する。(後略)」

村民大会での拓一の台詞。実はこの時点で復興することが果たして正しいのかどうか、それはもし自分がそこにいたらわからないと思っています。現に、その場にいた耕作も「復興に対しては疑いを持っている」と書かれていました。そして「持っているが、どの演説にも深い共感を持ってないのだ」とも。当事者でない人がいくら声高に叫んでも伝わってこないのは、昔からいまに至るまで同じなんです。政治家の皆さん、見えますか?

会場で拓一に野次を浴びせる人たちは、ただ騒ぎたいだけの人たちに見えます。どこにでもいるよね、そういう人。そんななかで、自分の意見を自分の言葉で言える拓一は本当にすごい。私が入混みで自分の意見を言う機会なんて滅多になく、強いて言えば中山競馬場のゴール前で「ユタカあー! 追え! もっと追え! 差せー! っ!」って叫ぶぐらいです。なんか違いますね。拓一さんごめんささい。

『続泥流地帯』 露のとう(二)

「仕える、つかえる? そう、事という字も、つかえると読むの。わたし、知らなかった。拓ちゃんは、ほんとに仕えているのよ。拓ちゃんのこの

苦労で、この田んぼがいい田んぼになったら、百年後、二百年後の人たちも、この田んぼのおいしいお米を食べれるんだもねえ」

私も知らなかったです。この『泥流地帯』『続泥流地帯』は創作なんでしょうけど、実際の出来事がベースになっていて、本当にいた人たちも作品に入っているの、ノンフィクションだと感じることもあるんです。私の知り合いのおじさんが上富良野で豚サガリの焼肉を食べたとき、一緒に頬張ったお米が本当においしくて、そのときにこのフレーズを思い出し、「このお米は拓一が育てたんだ。ありがとう拓一！」って感じたそうです。大げさな例ですが、知り合いのおじさんは感受性が少々豊かなのかもしれない。

『続泥流地帯』深山峠(二)

「いや、つらい目に会ったり、苦しい目に会ったりすることが、多いかもしれない。そんな時にな、ふつとこの広大な景色を思い浮かべて、勇気づけられるかもしれないんだ。人間はな、景色でも友達でも、懐かしいものを持っていなければならん。懐かしさで一杯のものを持っていると、人間はそう簡単には墮落しないものなんだ」

遠足に来た深山峠で、耕作が生徒に話すシーン。これは本当にそう思います。だいたい、世の中いやなことばかりです。そんなとき、私は旭川にある氷点橋から見える大雪山系の景色を思い浮かべて気持ち切り替えます。毎日通っている人にとっては当たり前前の景色なのかもしれませんが、

そうでない人もいるんですよ。

『続泥流地帯』汽笛(三)

(兄ちゃん！よかつたな、兄ちゃん！)

大団円のシーンですね。このシーンはどうしても映画化で使ってほしいなあ。

それはそうと、『泥流地帯』の最後が「耕作は深くうなずいた。再び、汽笛が長くひびいた。」で、『続泥流地帯』の最後が「深山峠にさしかかったのか、汽笛が三度長く響き渡った。」で、どちらも富良野線の機関車の汽笛のシーンで終わっているのです。これは、綾子さんが意識して書いたに違いないと思っています。私としては、上富良野で開拓をするひとたちへの応援というか、そのような意味合いなのではないかと勝手に解釈しています。

以上、好きなフレーズ6つを紹介しました。この一つ一つをとってみても、素敵なシーンばかりです。これ、本当に映画にできるんでしょうか？と耕作ではないけど今も半信半疑なのですが、きっと素敵な映画になるのでしょう。本当に期待しています。

泥流地帯に思う

浦川 裕子

「氷点」に出会ったのは二十代の初めでした。会社勤めの帰りに書店に寄っては三浦綾子の作品を買って読んだものです。

泥流地帯を読んだものその頃です。厚い文庫の上下巻でしたが、地下鉄の中、昼休みの休憩室、アパートの小さな部屋では電気スタンドを新たに購入して夜遅くまで夢中で読みました。祖先から受け継いだ土地を大切に、懸命に耕す兄弟。そのひたむきさに感動します。そこに訪れる過酷な運命。若い私は「なんてことだ」と悲しい気持ちでいっぱいでした。その災害を乗り越え、再び鋤を取る主人公たち。「頑張つて。また緑が戻るはず」と期待しながら読み進めました。その後も物語は続きます。

私がこの作品に出会った後も、たくさんの災害が日本や世界を襲いました。神様はいないのか。その度に思います。自然は容赦なく、人の命や大切にしていた物を奪うのです。科学がいくら進歩しても、人間の手ではどうすることもできないことが起こります。

しかし、戦争や紛争はどうでしょうか。考えの違う相手の物を破壊し、命まで奪う。誰にそんな

権利があるのでしよう。

ニユースで瓦礫と化した建物や、その側で泣き崩れる人々を見る度に私は「泥流地帯」を思いま
す。神様はいない。人間は神様ではないのです。静
かに生きる人たちの大切なものを奪う権利は誰
にもありません。

今日もニユースでは自然災害になすすべなく悲
しむ人々の姿が流れます。慣れ親しんだ土地を
去る人や、残ってまた以前のような生活を取り戻
そうという人の姿があります。

みんな悲しみを背負って生きています。
幾多の災害を乗り越えて私たちは生きています。
泥流地帯の主人公たちのように額に汗を輝かせ
て。自然の驚異と戦うだけで精一杯。人間同士で
傷つけ合い、奪い合うのはもうやめにしませんか。

「書き留めた言葉」

(ペンネーム) MIHO



生まれてきた意味は、を考えさせられる作品
であった。元々筆者の考えは、人間の人生とは長
い歴史の中での歯車に過ぎない。人、一人が生れ
て死ぬまでの間に何をしても生きても端的に言う
と「ただ歴史を繋ぐためだけの役割をこなしてい
るに過ぎない」のだ。と、思っていた。

この物語を通してそれがより肯定された様
な気がしたのだ。善人が何故死ななければな
らないのか、悪態をついたり、人から搾取して自
分だけ儲けようとしている者が何故助かるのか、
単純に運であると思われる。それでも善人であり
続けたいと思う拓一の考え方は素晴らしいと思
うし、耕作の真面目に生きていても馬鹿らしい
のではないか、という考えにも賛同できる。

筆者は、これを読む人間に「自分ならどうする、
どんな生き方を選ぶのか」を考える切っ掛けを与
える作品であると思ったのである。

もちろん筆者も考えた。拓一のような人間に
憧れる。そうでありたいとも思う、一方で現状は
耕作なのではないかとも思うのである。自分の身
を挺しても泥流に飛び込むであろうか、そんなこ
とを迷いもなく瞬時で判断できる人間なんてい
ないのではないか、いつも人もことばかりを優先

して仕事や家族のことを想い、自分の人生は後回
しにしてしまうのではないか、現状やりたいこと
をやって生きているという時点で拓一ではない様
がしてしまうのである。

与える側の人間にはまだ足りていない気
がする。人間レベルが低いのかも知れない、来世
も生まれ変わってしまうのではないかと自分自身
を分析しながら読み進めたのであった。

母親が子供たちを置いて札幌に髪結いになり
に修行に行く件もずっと不思議に感じたまま読
み進めたのであった。何故子供たちを置いて十
一年の間帰って来れなかったのか、途中で病気に
なったとはいえ本当に帰れないものなのか、その
ような状態で子供たちはずっと会うのを楽しみ
にしている。ずっと母親を信じて待っていたのであ
る。俄かに信じられない思いだった。筆者ならそ
んな親は親だとは思えなくなるのではないだろ
うか。時代のせいなのかかもしれないが、自分の親
でもない祖父母に何年も預けっぱなしで居られ
るものか。そのあたりが解せない思いが『泥流地
帯』の作中ずっとあったのだ。『続・泥流地帯』
で深城に舅とのあらぬ仲だと噂を流され村にい
られなくなったと、訳が少しだけ納得できたのだ
った。狭い部落では、変な噂を流されたり、求婚
を断って追いかけて回されたりしたら暮らせなくな
るものなのかもしれない。農家でなければどこか
に引越すこともできただろうに、それもままな

らないのか市三郎たちがわざわざ開拓する為にこの地に来たのだからなおのことなのか、今より複雑な環境なのだと理解した。

『続・泥流地帯で一番気になった言葉は、「石にかじりついて」というフレーズである。氷点でも使われていた表現だが、泥流の後農村復興したい拓一と村長の表現にあまりにも多く登場する。不自然なくらいの使用頻度に作者の意図や癖を感じたのである。

「善因善果」という仏教の言葉もキリスト教の考え方で言えば良い行いをしていても悪いことはあるし、またその逆もありうる。とにかくそういう概念ではないのだ。人は信じたいものだけを信じて納得するものだ。筆者は改めて思ったのだ。善行の者が病気になるたりすればそう思わざるを得ないのだ。

富の結婚も釈然としない。一位合格の耕作が中学進学をあきらめてまで富を武井と結婚させて本当に良かったのだろうか。厳しい姑がいる家の嫁に行つて死ぬまでの間の数年本当にそれで良かったのか悔やまれる思いである。いくら好きな相手と結婚できても入った家でいじめられて、こき使われて、食べるものも一番最後に回されて痩せていき、そんな暮らしが幸せなのだろうか。現代結婚の在り方からして全く理解できないのである。何があっても戻ってくるなど、市三郎が言ったのも意味が分からなかった。可愛い孫でもそ

う思うのか、思っていないけど、そう言うのがやさしさだと思っているのか。時代なのかもしれない。女性に生れただけで損だと思ってしまったのである。

最後の章で「白いハンカチ」が振られた。これはこの物語の最大のハッピーエンドである。星崎先生宅での下働きの後、拓一と結婚できたのか、出来なかったのかそこまで書かれていないが、全てが上手くいったように想像できる。

この物語は、「続」まで読んで初めて救いがある。最後まで読んで理解できた。そういう物語だったのである。何もかも不自由に感じる位の登場人物たちの人生だが、その中でも心豊かに人を思いやり、清い心でまじめに生きるそんな人間たちの物語であった。何でもある。行きたければ自由に学校も行ける贅沢すぎる現代に甘んじてはならないと、読後襟首を正される思いになったのである。この物語全体で一番心に残った言葉がある。それは市三郎が言った「なりたいたいと思つた者になれば、それが成功者だ」思わず手帳に書き留めた。これからこの言葉を糧にして生きていこうと心に決めたのだ。

溢れるばかりの愛

山田 千晴



部屋の一角に、私は、三浦綾子さんとご夫君、光世氏の写真を飾っている。三浦綾子記念文学館で購入した、ご夫妻のメッセージ付き写真集『愛つむいで』の中の一枚をコピーしたものである。写真集には、光世氏の直筆サインと、聖書の言葉が入っていて、私の宝物である。

この作文コンクールがあることを知ってから、随分と時間が経ってしまった。ぜひ書きたいと思っているのに、なかなか書けないのだ。三浦綾子文学を敬愛するあまり、言葉が出てこないのである。心や頭の中には、思いがぎゅっしりと詰まっているにも関わらず。さらに、私の様な者が、三浦綾子さんの代表作に関して、稚拙な文章を書くなんて、無礼ではないか、との思いもある。まとまりのない文章になるに違いないのだ。

それでも、どうにかして書いてみようと思う。書かずにはいられない。『泥流地帯』と『続泥流地帯』は、三浦綾子さんからこそ書き得た傑作で、できる限り多くの人に読んで欲しいと、声を大にしたいからである。一部の人だけが知っているだけでは、あまりにももったいない作品だと思うからである。

主人公の石村耕作は、ご夫君の光世氏が、そして拓一は、光世氏の兄上がモデルだという。それは、後にネット上で確認したことが、私は、『泥流地帯』を読み始めてすぐにそうだと気がついた。

もちろん、『泥流地帯』、『続泥流地帯』は、あくまでも小説であるが、モデルがわかって読み進めていくと、愛読者である私にとって、綾子さんの心や思い、光世氏に対する、綾子さんの深い愛や敬意が隙間なく織り込まれていて、感動が何倍にも膨れ上がる。何度読み返しても、感涙し、読後、心の中に柔らかな光が射してくる。

三浦綾子さんの作品は、いずれもそうであるがこの『泥流地帯』と『続泥流地帯』も、心に響く言葉の宝庫である。一生懸命生きようとしている人々の心を支え、希望をもたらす言葉が、まるで満天の星のごとく、ちりばめられている。それはそれは、眩いほどに。

そして、この作品は、私たちに、いかに生きるべきかを真剣に考えるよう、丁寧に提示してくれる。それも、高みからではなく、作品自体が私たちの視線まで下りて来て、示してくれている。その視線はあくまでも優しく、謙虚であり、あたかも三浦綾子さんが、「一緒に考えましようね」と言ってくれているように感じるのだ。

人間、生きていくうちに、心が汚れてくる、「生まれ狭く」なる。汚濁にまみれた気持ちになる。少なくとも、私はそうだ。でも、『泥流地帯』、『続泥流地帯』は、そうなるてはならないのだと警告し、誠実に生きる秘訣を教えてくれる。そして、良く生きるのには、これからでも、遅くはないと私を励ましてくれる。

拓一は、まるで誰も気がつかない所にひっそりとおる、寶石のようだ。誰かが見ても見なくても、陽光のもとに、堂々と咲く大輪の花のようでもあ

る。拓一の言葉一つ一つが、心を揺さぶり、ずっと心に蓄えておきたいと思う。

弟の耕作は、兄の生真面目さ、一徹さに驚き、呆れ、時には反発さえ覚えながらも、その兄の言葉をきちんと把握し、正當に兄を評価している。反発していた兄に、心で(兄ちゃん、ごめん)と詫び、しばしば、兄の実直さに感嘆して(かなわぬ)。兄貴にはかなわぬ)と認め、常に自分を庇ってくれる兄に感謝し、尊敬しているのである。

そして、耕作もまた、兄と同じ方向を向いていることが、実に頼もしい。耕作のその素直さが私にはいとおしく、耕作の純情さや潔癖さは、長らく忘れていた感情が心に蘇り、はっとさせられる。

姉を結婚させるために、一番で合格した中学への入学を諦める耕作の心情、泣きながら一人で祈っている母の姿を偶然に見た時の、耕作の声にならぬ声の描写は、涙なしには読めない。

人生には、容赦なく理不尽な出来事が襲いかかることがある。十勝岳大噴火の時に、真面目に生きていた人々が一番の苦しみに会う。日本を襲った、数々の自然災害の中でも、それぞれの人生の中においても、そういった例は、多々あることであろう。作品が証しているように、人生は、善因善果、悪因悪果とは限らないのだ。確かに、耕作の言う通り、「因果応報は人間の理想」なのである。

兄弟の母、佐枝の言葉、「人間の思いどおりにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですからね、苦難に会った時に、それを災難と違って歎か、試練だと思って奮い

立つか、その受け止め方が大事なのではないでしょうか」という言葉の何と鮮烈なことか！そして、その佐枝の言葉がわからないと呻く修平叔父に、拓一が明るく言う、「叔父さん、わかってもらかんなくてもさ、母さんの言うように、試練だと受けとめて立ち上がった時にね、苦難の意味がわかるんじゃないだろうか。俺はそんな気がするよ」という言葉の、何と瑞々しく、希望に満ちていることか！

どんな苦難を受けても、ひねくれたりせず、誠実に、真摯に自分の人生を生き抜く。私も、難しいけれど、そうありたいと強く願う。

そう言えば、三浦綾子さんのデビュー作『氷点』の中の、陽子の遺書に、「石にかじりついて、ひねくれたりはすまいという、強い気持ちで生きて参りました」という文がある。

これは、光世氏の妹さんが、綾子さんに辛かった幼少時代を振り返りながら、実際に伝えた言葉だという。その言葉に感動した綾子さんが、『氷点』の陽子の言葉として、そのまま使ったと、読んだことがある。

この妹さんの姿は、紛れもなく、兄弟が大切にしている妹、良子に反映されているに違いない。そして、佐枝は、若くして夫を亡くして、子供たちを親族に預け、生活のために都会へ出て行った、光世氏の母君がモデルに違いないのである。

この作品の美しさは、何よりも、三浦綾子さんの実生活が裏付けていると思う。綾子さんと光世氏の類まれなる、麗しい結婚生活は、三浦綾子文学そのものである。

光世氏は、病んで、寝たきりの綾子さんに結婚を申し込み、病が癒えるまでの長い間、誠実に待って、結婚したという。さらに、光世氏は、綾子さんが作家となり、多忙を極めるようになると、病弱だった綾子さんを傍らで護り、協力するために、公務員の仕事を退いたのである。その後、綾子さんの小説の口述筆記、編集者とのやりとり、手紙の返信……あらゆる仕事をこなしながら、綾子さんの才能を信じ、支え続けたのであった。その光世氏に、綾子さんは、生涯に渡って、深く感謝し、光世氏に対するその気持ちを、率直に文章にしている。

愛と信仰と真実を貫いたお二人。この世に、こんな魂を持ったご夫婦が存在したという事実は、私の心を救ってくれるのだ。そして、そのご夫婦が心をこめて作り上げたのが、数々の作品であり、『泥流地帯』、『続泥流地帯』なのだ。

先の『愛つむいで』に光世氏の言葉が載っている。「綾子はおよそ、事を始めるのに臆することがなかった。それでも、私が書いて欲しいと勧めた小説『泥流地帯』はためらった。人一倍慎重でもあったが、失敗は恐れなかった。」とある。

そうか、この作品は光世さんの希望で書かれたものなのか。綾子さんは、最初、ためらったのかと思っただけである。

しかし、綾子さん、よくぞよくぞ書いて下さった。しかも最愛の光世氏とそのご家族をモデルにして、愛する光世さんの願いを聞き届けることによって、大いなる作品を私たちに届けて下さったのだ。ご夫妻のお働きに、私は、心から感謝して

いる。

『泥流地帯』、『続泥流地帯』は、主人公とその家族の描写はもちろんのこと、上富良野の自然の美しさと、当時の農業に携わる人々の様子が余すところなく描かれていることも、素晴らしい。読みながら、目の前に情景が浮かぶのである。また、それぞれの登場人物の一人一人が、いきいきと描かれている。実在した、上富良野村長の吉田貞次郎氏の人格の高さ、子供たちの無邪気さ、田谷のおどのおかしみ、福子、節子のそれぞれの個性等々、挙げればきりが無い。それぞれの容姿までも想像できるほどの、三浦綾子さん独特の描写が、私は大好きである。

また、始めは、がさつな人間と思われた修平叔父が、災害の後に、耕作兄弟たちに見せる、不器用だが滲み出るような優しさ。また耕作が自分の生徒だった時に、悪質な苛めを繰り返していた益垣先生は、同じ学校の教師となった耕作を、泥流に流されてしまったと思ひ込む。しかし、生きていた耕作を見た瞬間、間、「転がるように駆けて来て、耕作を抱きかかえ、泣きながら、「よく生きていた、よく生きていた」という場面は、印象深い。

読む側には、ひたすら悪の部分しか見えない、深城や富の姑シンだって、きっと綾子さんから見れば、善人の部分があるに違いない。きっと、人間誰しも、深城やシンになる可能性があるのだ。誰しも、善人にもなれば、悪人にもなり得るのである。私は、自分が悪人になりそうな時に、この作品に出て来る、様々な珠玉の言葉をぜひ思い

出したい。

それにしても、三浦綾子さんの、人間をみつめるまなざしの何と優しいことであろうか。その優しさと寛容さに、私は心を打たれる。

これは、愛である。溢れるばかりの愛である。愛が随所に、各ページに溢れている。凄いと思うのは、その愛が、人間の弱さや醜さすべてをきちんと認めて包み込んだ上での愛であることだ。

三浦綾子さんは、愛を惜しみなく与える人である。そして、綾子さんのお隣には、常に光世氏がいることを、私は強く感じる。お二人は、生前はもちろんのこと、天に召されてからも、作品を通して、ずっと限りない愛を注いでくれている。

この、溢れるばかりの愛を、私たちは、しっかりと受け止めなければならぬ。そして、その愛を他の人々に分け与えることができれば、世の中は、きっと、平和になるに違いない。

そう、「平和をつくり出す人たちはさいわいである(聖書)」

これは、私が持っている『愛つむいで』に、光世さんが書いて下さった言葉である。ご夫妻の様に、平和をつくり出す人になりたい。

続泥流地帯その後

細谷 裕士



私は石村政雄君の友人です。彼は三浦綾子の小説「泥流地帯」、「続泥流地帯」の主人公である石村耕作のお孫さんで現在六十四歳。彼の名前「政雄」は明治四十二年に塩狩峠で殉職した長野政雄氏にちなんでいるそうです。彼が生まれた昭和三十四年は長野政雄氏没後五十年にあたっており、長野氏の行動に感銘を受けた彼の二両親が、長野氏のお名前を頂戴したそうです。

「続泥流地帯」の最後では、彼のおじいさんのお兄さんつまり石村拓一さんとその妻になる福子さんがめでたく結ばれる設定となっておりますが、作品の主人公である彼のおじいさんの耕作さんとおばあさんの節子さんがどうなったかは、書かれていません。私や友人は当然まだ生まれていませんが、友人の政雄君から聞いた話として、彼のおじいさんとおばあさん達のその後をお話して、石村兄弟の歴史を語ってほしいと思います。

さて、ご存じの通り、彼のおじいさんの耕作さんとおばあさんの節子さんは幼いころからの知り合いで、おじいさんが小学三年の秋に、おばあさんに向かって石を投げつけたのがなれそめだそうです。おじいさんがその兄さんの拓一さんや友達の曾山国男福子兄妹と一緒に山ぶどうを取りに行った時のことです。その山で、たまたま遭遇したおばあさんの父親つまり政雄君の曾祖父にあたる深城鎌治とけんかになり、深城の言葉が腹に

据えかねたおじいさんが、石を投げつけたところ、深城がよけたため後ろにいたおばあさんに当たったらしいのです。深城は自分の娘が結婚できなかったらどうするのだと怒ったらしくて、その時おじいさんは「俺が結婚する」と宣言したそうです。

その当時、権力をほしのままにできた深城に正面から向かったのはおじいさんの耕作さんのみで、深城の周りの人たちは、深城があくどいことをやっても、何も言えなかったようです。その事件以降、おばあさんがおじいさんにぞっこんだったそうで、現代ではごく普通に見られる形ですが、一歳年上のおばあさんのほうからおじいさんのほうに積極的にせまっていたらしいのです。幾度となくそういった場面はあったようで、お祭りの夜など、身動きが取れなくなったのを利用して、おばあさんがおじいさんに相当アプローチをしたようです。

改めておじいさんの耕作さんの気持ちがおばあさんの節子さんに向かったのは、おじいさんが十九歳の時の泥流災害復興反対の集会が終わったくらいからで、おばあさんがおじいさんに向かって、自分の思いを何度も何度も語っています。じつくりと口に出して、何度も何度も思いを表現する必要があり、その気持ちが出たのは、福子さんを深城が経営する深雪楼から脱出させた時、つまり、「続泥流地帯」の最終段階の時だったそうです。

福子さんと節子さんが旭川の沼崎先生の元に到着して一か月が経ち、おばあさんの節子さんは

看護師として働き、福子さんは同じ病院の雑用係として働くことになりました。一方、おじいさんのお兄さん拓一さんとおじいさんの耕作さんは上富良野に住み続け、畑の補修など、来春の準備をすることにしていました。結婚の申し込みもおばあさんからおじいさんのほうにしたそうで、このころだそうです。ただ、昭和初期のことで、世界恐慌の真ただ中で、天候不順による凶作が続くこととなり、おじいさん達の生活は苦労の連続であつたようです。彼のお父さんが生まれるには、少し時間が必要だったそうです。

その後、おじいさんのお兄さんの拓一さんと福子さん夫妻は、凶作に苦しめられ、拓一さんがせつかく復興した畑を手放すことになりました。おじいさんの耕作さんは尋常高等小学校の教師となっていました。第二次世界大戦中には、教え子の中で軍隊に召集され、外国で戦死した者もおられ、おじいさんは教員を一時期辞めざるを得なかつたようです。おばあさんは旭川で看護師、福子さんは雑用係から検査技師となり、それぞれが戦時中の一家の家計を支えていらつしたようです。

政雄君のおじいさん達に本当に平穏な時期が訪れたのは、第二次世界大戦が終わった昭和二十年後半からでしたが、おばあさんと福子さんは旭川住まい、おじいさんとそのお兄さんは上富良野住まいと、当時珍しい単身赴任、というより別居結婚だったそうです。連絡手段もスマホがあるわけではなく、手紙しかない時代に、信じられない

いほど固い絆で結ばれていたようで、その固い絆は、「泥流地帯」や「続泥流地帯」の作品の中で節子の語りと、耕作の思いを描写した個所で非常に強く感じられます。

昭和四十年代、政雄君のおじいさんの耕作さんは、小学校の教師OBとして、泥流災害を伝える伝道師として防災教育に力を注ぎます。お兄さんの拓一さんは、上富良野の農家として、地域社会のリーダーとなり、農村地帯を支えることとなります。友人の政雄君は、気持ちとしては二人の跡を継ぎ、公務員となり上富良野の発展に貢献することになります。今は、十勝岳災害百年を目前にし、その準備に忙しいのかもしれない。

例年、七月中下旬にラベンダーの季節が巡ってきます。雄大で美しい上富良野のラベンダー畑を眺めていると、政雄君のおじいさんやおばあさん達、そして私の幸せだった人生特に北海道での生活が、走馬灯のように心に浮かびます。この幸せな時期がいつまでも続くよう、切に祈っています。
 「私は石村政雄君の友人です。」はフィクションです。しかしながら、耕作節子夫妻とは一生、心の友達でいたいと思っています。」

教師・三浦綾子に学ぶ「教育の本質」とは

(ペンネーム) 姫川 正宗



私は今、ある公立の小学校で事務職員として働いている。学校事務職員の業務自体は、予算の執行や備品の管理等、他の「事務職員」と名のつく職業のものから、さほどかけ離れてはいない。しかし「学校で働いている」という特性上、学校に通っている子供たちや、彼らと向き合っている先生方のリアルな姿を日々目の当たりにしている。しかも、求められるのは事務職員の業務のみならず、授業や行事などでは一スタッフとして役割を与えられたり、休み時間には一緒に遊んだりするなど、子供たちの前で「先生」として振る舞わなければならない状況にも少なからず直面し、指導の難しさに思い悩むことも多い。また、それと同時に「教師」として子供たちを教え導きながらも「一人の人間」として精一杯生きている先生方の苦悩についても、同僚として目にしていく。そんな、リアルな学校現場を知っている立場だからこそ、三浦綾子の作品に出てくる学校の場面や、教師と子供の描写について、単なるストーリーの展開や人物像の演出にとどまらないリアリティがこもっていることをしみじみと実感するのである。

筆者が初めて三浦綾子の小説を読んだのは中学生のときである。きっかけは、祖父母宅の本棚で見つけたという、ごくありふれたものだった。その後、今の仕事に就いてから、あるきっかけで三浦綾子について学ぶ機会を得て、そこで初めて彼

女の生い立ちを知った。十代の頃から代用教員として小学校で七年間働いていたこと。第二次世界大戦中において軍国教育を熱心に行っていたが、敗戦を機にそれまでの教育を「否」ときれ「私は誤った教育によって子供たちの貴重な時間を奪ってしまった」と絶望し退職したこと。失意のうちに肺結核を患っていることが発覚し、襲い来る虚無感から自殺未遂を起こしたこと……それまでは単なる「同郷の著名な小説家」としてしか認知していなかった三浦綾子だが、その後の十三年にわたる闘病生活や信仰についても含めて、彼女もまた「教師」として精一杯生きた「一人の人間」であったことを知り、その存在がぐっと身近に感じられた。

『泥流地帯』は、主人公の一人である耕作の幼少期から物語が始まる。学校生活の描写も多く、級友や先生方との交流の中で悲喜こもこももの経験を通して、耕作が一人の人間として成長していく過程が描かれている。当時、高い学力と経済力を必要とされた中学校(旧制中学)を周囲の勧めで受験し首席で合格するも、「貧しさ」という理不尽な理由のために、家族に苦勞をかけてしまうことを悟って進学を諦める。しかし、慕っていた恩師の菊川先生のような教師に自分もなりたいたいと思ひ、高等科を卒業後、正規採用試験のための勉強に励みながら代用教員として働くことになる。

教師を目指すきっかけとして、「良き師」の存在は今でも決して珍しいものではない。(『銃口』の中でも主人公・北森竜太と恩師・坂部先生の間で同様の関係が描かれている。)教師は多くの子供

にとって「親族以外で初めて関わる大人」であり、教師が与える影響は想像以上に大きく、その後の子供の人生さえ変えてしまいかねないほどである。

しかし、良い影響ならまだしも、その逆も十分にあり得る。子供も教師も結局は一人の人間同士なので、性格等の相性は当然生じてしまう。(無論、教師側はそのために子供との関係作りを諦めるわけでは決してなく、とことん子供に寄り添う姿勢をとる。)そして、子供あるいは学生だった時に嫌いな先生がいたせいで、その先生が受け持っていた教科をも苦手に感じたり、学校自体に行きたくなくなったりすることも、残念ながらあるだろう。また、そこまでとはいかなくても、あるとき先生に言われたことが(たとえそれが教師にとっては何気ない発言だったとしても)良きにつけ悪しきにつけ、心に残ってずっと忘れられないということもあるだろう。

これは、子供が持つ感受性の高さからくるものだと考えられる。作中でも、新たに六年生を受け持った耕作が、彼らが事実を観察せず一般的な観念に基づいた作文しか書かないことに対し、「子供はもつと物事を見つめ、絶えず驚きを感じ、そしてそれを自分の言葉で現わすはずなのだ」と愕然とする場面がある。

感受性の強さには個人差があるが、誰でも一生のうち、おおむね十代半ば頃までの感受性がとりわけ豊かなのではないかと、学校現場で子供と相対してみても強く感じている。以前、たまたま廊下で会った子と軽くおしゃべりをした際、こちら

の何気ない言い回しはその子にとっては印象的だったのか、しばらく楽しそうに真似をされたことがあった。普段は授業に入ることがない、その子にとっては関わりの薄い存在である筆者に対してもそうなのだから、担任ともなればその影響は推して知るべしである。

その理由は憶測だが、子供はまだ生まれてからの時間が短く経験も少ないがゆえに、無意識に高くアンテナを張り外部からの情報をキャッチして積極的に自分の中に取り込もうとしているためであることと、経験が少ないがゆえに、他者、特に年長者の発言の正否を判断することが困難で、言葉をそのまま捉えてしまうためではないかと考える。また、身の周りの年長者の中でも、子供にとって「親」と「教師」は特別な存在であり、思春期を迎え自我が育って反抗期が始まるまでは「親や先生の言うことは正しい」と信じてしまう面もあるのではないかと推測する。後者については作中でも、大人同士の争いが子供にも影響を及ぼしている場面がある。被災後、村の復興を目指す村長派と、途方もない復興に無駄金を使うべきではないと主張する反村長派が対立していたが、耕作が引率していた遠足の途中で村長宅の前を通った際、何人かの子が幼い娘に暴言を吐き、泣かせてしまった。その子たちに深い考えはなく、ただ単に親の言うことを真似しているだけだろうと看破していた耕作は、「きみたちにそんなことを言わせてしまったのはぼくたち大人の責任だ」と言い、村長の娘に謝った。そんな耕作の姿に反省し、暴言を吐いた子たちも謝った、という場面

である。

子供がもつこうした性質は、指導する立場にとつてはやりやすい反面、担任が学級経営から教科の指導に至るまでの一切を受け持ち、学校生活におけるほとんどの時間をクラスの子供たちと過ごす小学校においては、担任の振り舞いや発言が学級内で絶対的な権力を持つという危うさをも孕んでいる。三浦綾子は、このような危うさを肌で感じていたがゆえに、戦時中に子供たちに施した教育の過ちを知ったとき、職を辞してしまうほどの深い後悔に苛まれたのではないだろうか。

作中で、教師になった耕作と印象的な描かれ方をしているのが教え子の一人・坂森五郎である。五郎は当初、担任となった耕作に心を閉ざしていたが、耕作の血の通った温かい指導を受けて心を開いていく。しかし、運命の大正十五年五月二十四日。雨のために耕作は退勤後の農作業ができず自分と遊んでくれるだろうと期待して、五郎は市街からわざわざ四キロ以上も歩いて、耕作の住む日進の沢に遊びに来た。そこに、十勝岳の噴火で発生した泥流が襲いかかり、五郎は市街の生徒で唯一の犠牲者となってしまったのである。

耕作は、五郎の健気な行動や胸中を思い、自分が今まで五郎のためを思って懸命におこなってきたことが、かえって五郎の命を奪う結果となってしまったことを深く深く悔恨する。三浦綾子はこの耕作の姿に、先述した自身の教師人生における深い悔恨を重ね合わせたのではないかと、筆者には思えてならないのである。三浦綾子は子供たちの命を奪ったわけではないが、教師が子供の人生

に与える影響の大きさを考えると、命を奪うに等しいことをしてしまった……と猛省したのではないだろうか。

また、教える者の責任を説いたものとして、新約聖書の「ヤコブの手紙」に「私の兄弟たち、多くの人が教師になつてはいけません。あなたがたが知っているように、私たち教師は、より厳しいさばきを受けます。(三：一)とある。(なお、ここで言う「教師」とは、当時の教会で神や聖書について人々に教え諭す聖職者を指すが、同様に人々を教え導く立場にあり、本来の意味から離れて聖職者と呼ばれることもある、今日の「学校の先生」と同義だと考える。)ここでは、「言葉」が持つ人への影響力や危険性が説かれ、言葉を用いて教え諭す立場にいる人間には大きな責任が伴うということが書かれている。そもそもキリスト教は「罪嘘や嫉妬・悪口など、法律で裁かれないものも含む」を犯さない人間は絶対にはない」という教えが土台になっているため、「一人の人間」にすぎない教師は、より一層、自分が放つ言葉に気を付けなさいよ、という戒めが記されている。三浦綾子がこの箇所を読んだ際、はたしてどんなことを感じただろうか。彼女がキリスト教と出会ったのは、すでに職を辞した後、長い闘病生活の中であつたが、おそらく改めて過去の行いを省みただけではないだろうか。

また、聖書といえは、『続泥流地帯』の中では、旧約聖書の「ヨブ記」について言及されている。敬虔な信者であつたヨブという男は、多くの子宝と財産に恵まれ幸せの絶頂にいたが、「さすがのヨ

ブも不幸になれば神を呪うに違いない」と考えた悪魔がヨブの子供たちの命や財産を奪い、さらにヨブ自身をも皮膚病にしてしまう。自分の行いのせいではない、いわば理不尽な目にあつてもなお神を呪わず謙虚に生きるといふヨブの生き様が、泥流で家族や住む場所を理不尽に奪われても懸命に生きる人々を描いた『泥流地帯』のテーマとリンクする、象徴的かつ包括的な場面である。

一作中で耕作はたくさんの理不尽な目にあうが、学校生活下でいえば益垣先生の存在が印象的だろう。具体的には、耕作を含む農家の子は市街の子よりも劣っていると決めつけた言動をとったり、普段は農家の忙しい家庭事情を考慮せずに農家の子ができていないことを叱りつけるのに、耕作が皆の推薦で学級委員長になりかけた際は「家のごとで忙しい耕作を思いやれ」と言つて市街の子を委員長にしたりするなど、作中の描写だけでも数えきれない。このような扱いは耕作も子供心に理不尽だと思つていたようで、菊川先生を含む先生方が益垣先生の研究授業を見に来たシーンで、授業が思うように進まず困つた益垣先生に指名された際、答えがわかつているのにわざと答えず先生を困らせる。しかしその後、背後から菊川先生につつかれ「今まで勉強を教えてくださいました菊川先生の活券に関わる」と思い直し、解答したことと授業が進むという場面がある。この研究授業のシーンひとつとっても、「たとえ理不尽な目に遭つても、腐らずに正しい行いをする」ことが大切だ」といふ『泥流地帯』のテーマがうかがえる。

益垣先生の耕作に対する態度や言動は、教師

のあるべき姿からはあまりにもかけ離れており、到底擁護できるものではない。彼の振る舞いは、教師ではなく一人の人間そのものの姿なのである。彼も人間なので、「農家の子は劣っている」という偏見を持っていた。しかし、耕作はそれに当てはまらず非常に優秀だった。他にも何か気にならぬことがあつたのか、彼は耕作のことを良く思つていなかったようである。このこと自体は、一人の人間として致し方ないことだと考える。しかし、教師ともあろう者が、一個人としての感情を正当な理由なく態度に表して子供にぶつけるといふことは言語道断であり、そうしないよう努めて振る舞うべきである。学校生活下で子供が「理不尽だ」と感じることを完全になくするのは困難を極めるが、先述の子供に及ぼす影響のことも考慮すると、教師側が積極的にその原因を作り出してはならないと筆者は考える。

ここで、先生も一人の人間だということを、作中の別の例をあげて見てみたい。泥流で家族も家も失いつつかうじて生き延びた耕作が、しばらく真剣に授業に取り組めず、「こんな授業には何の意味もない」とさえ考えて無気力に陥つてしまふ。降りかかった災厄の大きさを考えると、無理もないことである。学校の先生も一人の人間として精一杯生きる上で、さまざま困難にぶつかることがある。耕作のように突然の不幸に見舞われることもあるし、家庭のことや健康の不安をはじめ、小さきさまざまな悩みを抱えている。そうだけでなく人間なので体調や気分の波があり、常に全力で子供に向き合うのは難しい。

以前勤務していた学校で、ある区域の清掃担当となり、毎日子供たちと掃除をしていたことがある。真面目に取り組むばかりではなく、集中力を欠いて遊びだしたり友達と揉めたりするなど、常にエネルギー全開で生きている子供たちに対して、「こちらも」どう指導をすればよいだろうか」と全力で向き合つて、毎日のわずかな数分間であったがともエネルギーシユな時間を過ごしていた。慣れないことだったせいもあるが、日によつては「ちょっと頑張れるかわからないな……」と思うときも、正直に言えばあった。その経験もあり、毎日「おはようございます」から「さようなら」までずっと子供と向き合うことの難しさと大変さが身にしみてわかるため、筆者は先生方を心から尊敬している。

さて、一人の人間として言いようのない虚しさに囚われていた耕作も、あるきっかけで立ち直ることができた。それは、泥流から生還した児童の作文を読んだためである。自分以外の家族が泥流で亡くなり、生きていても仕方がないから死んでしまおうかと思つたが、幸い父が生き残つており、生還を心から喜び合つたという作文である。耕作も、家族を助けようという泥流に飛び込んでいった拓一という兄がおり、一度は生還を絶望視したものの、奇跡的に助かつて再会することができた。再会後、誰が何と言おうと復興をやり遂げてみせるとまじめに働く拓一の姿に「見込みがない復興に命をかけても無駄だ」と耕作は苛立っていたが、罹災児童の作文を読んで「自分も兄も生き残ることができた。それだけで十分感謝すべきなのだ」という大切なことに気づき、以前のやる気が戻つたのである。

子供は大人よりもできることが少ないが、高い

感受性と純粋なまなざしで物事を見つめ、大人が気づかないことを指摘したり、表現したりして時には我々大人をハッとさせる。これは、子供も「一人の人間」として彼らの世界を精一杯生きていくためであるが、教師との間には、決して「一方通行的に」勉強だけを「教え教わるだけではない、お互いが成長し合うための心のやりとりが感じられる。だが、一人の人間同士としてやりとりする際、教師の方には、子供の成長に寄与するために、一人の人間としての苦悩や私情を露わにせずに振る舞うことができる成熟した人格が暗に求められている。先述した「教師は聖職者と呼ばれることもある」というのは、この期待の現れだと考えられる。

現在の教師に求められているものは、それだけではない。ここ数年の技術のめまぐるしい発展や、コロナ禍におけるリモートの台頭などの社会情勢を受けて、教育現場も大きく様変わりしている。タブレット端末が開始された頃は、まさかこれが子供一人に一台貸与されることになるとは、誰が予想したであろうか。また、これまで当たり前とされてきた「教師が一方的に話したり黒板に書いたりしたことを手で書き写す」といった授業の形式は今や根本から覆されつつあり、価値観や知識を日々アップデートしていかねばすく置いていかれるほど、教師には次々と新しいスキルが求められている。

また、教員の労働環境に関しては、近年ニュースでもよく取り上げられている「働き方改革」が印象的だろう。客観的で誰の目にもわかる「勤務時間数」を減らすために、今まで当たり前になっていた業務の取捨選択が求められている。教員の過酷な労働環境が改善に向かう効果が期待

されつつも、画一的な働き方改革で教育の本質まで見失ってしまわないかという懸念もあり、慎重に動いているところである。しかも、それらと並行して、テストで良い成績を残せるような学力の向上も従来どおり求められているし、そのような中で、教員のなり手不足も叫ばれている。教育現場が直面しているこの難しい問題の解決に向けて、筆者は学校事務職員としてできる限りのサポートをしていく所存である。

最近、三浦綾子が教師時代のことを書いたエッセイなども読んでいるが、わけても、『道ありき』の「貧しくてお弁当に漬物しか持ってこられない子には、自分のおかずを分けてやった。分けてやらすにはいられないようなつながりだが、教師と生徒のつながりではなからうか」という箇所には、彼女の子供に対する慈愛の精神が集約されているように思う。そしてそれは、耕作たちと菊川先生が続いているというエピソードからも、しっかりと子供に伝わっていたのではないだろうか。時代は違えども、三浦綾子は教育における本質を体現していたように思う。筆者は教師ではないが、子供とふれあう立場で働き、教育に寄与する者として、三浦綾子先生からヒントをいただきながら、先生方と共に教育の不易と流行を見極めて実践していきたい。

青き礎

(ペンネーム) すい



かつて馬という動物は家畜として人間の暮らしに欠かせない存在だった。農耕や運搬、移動手段などとして人間の暮らしを助け、人々は馬を家族同然に大切にしていた。また、人に好意的な馬ならば深く心を通わすこともあっただろう。それは単に「家畜」とは一言に呼べない存在であったかもしれない。

北海道開拓が盛んだった時代、ここ上富良野の開拓農家、石村家にも新しく農耕馬が一頭連れられてきた。家人が集まりつぶさに観察される。

「ほら、良い馬買えたな親父！」

「奮発しちゃったがな」

「青毛だなあ、こいつは青だ」

男たちが楽しそうに馬を囲む姿を幼い子を抱いた一人の女性と、隣に立つ男児が後ろで見つめる。

「ほうら、拓一、耕作。お馬さんよ、青って言うのよ」

「あお？」

男児の名は拓一。やんちゃ盛りで大きな馬を見ても怖がりはいししない。すぐに馬のほうへ駆けてあお、あお、と声を掛けていた。一方抱かれる幼子の耕作はまだ見ぬ大柄な動物に恐怖を覚えたのかぐずり出した。

「あらあら……大丈夫、大丈夫だからね」

「佐枝さんや、耕作は馬をまだあんまり見たこ

とないからね、怖がるのも無理はない。少しずつ慣れていけばええ」

「お義父さん……そうですね、分かりました」

「佐枝ー！ 拓一乗せてみていいか！」

「ちよつとあなた、拓一はまだ小さいんですよ。いけません、気を付けて下さいいな」

「む、すまん……」

夫の義平がしゅんとした。

「おまえ、調子に乗るからだべ」

義兄の修平がニヤツとこぼく。

「拓一、もう少し大きくなったらおまえも青に乗るんだぞ。青と仲良くしようなあ」

拓一は父の言葉の意味が分かってか分からないか、嬉しそうに、

「うん、あおに乗るー！」

と笑ってみせた。

ひとしきりお披露目が終わったあと青は既に連れられふかふかに用意された藁の上に立って休みをとった。

（仲の良さそうな家族のようですね、良かったわ。あの拓一という子……早く大きくならないかしら……）

「青には心があつた。」

青は敏感に石村家の雰囲気を感じ取り、貧しくも明るく暮らしている家族に迎えられたことに安堵していた。博労に連れられて来る間、どんな主人に仕えなければならぬのか仲間内で心配したものだ。

（他の皆はどんな家に貰われていったのかしら……皆幸せになれるといいわ……）

青は長旅での疲れからか眠りに落ちた。そうし

て最初の石村家での夜が更けていった。

翌日から青と石村家の畑仕事が早速始まった。プラウと呼ばれる木製の犁を青に引いてもらう。みるみるうちに土が掘られて反転させられてゆく。

「いやあ、馬が居ると本当に助かる。仕事が早い早い」

「青様々じやのう」

「大人しくて優しい良い子だねえ」

口々に褒められて上機嫌になった青は張り切って仕事をした。

「ぶるるる……」

（なんだか嬉しいわ）

青は初めて人間と共に畑仕事をし、共に苦労をする事を喜ばしく感じた。

「いいかー厩に入れたらちゃんと馬の足と腹を洗うんだ。拓一、見るか？」

「うん、じつちゃんあのさ、俺、青撫でていい？」

「おお、いいとも。拓一は青が好きか」

「うん、好きだ」

小さな体を一生懸命に伸ばして腕を青の鼻に届かせようとした。勿論届きやしない。それを見て察した青は頭を下げた。

「うわあ……ヨシヨシ」

青は長いまつ毛の目を細め拓一に鼻を擦り寄せた。

「こりやたまげた。青は働きの者の上に賢いべ」

「じつちゃん。青、あつたかいなあ」

「そうかそうかあ」

（全く、今日のところは青の世話はわしがやっ

てやるべか…)

心の中で仕方なく思いつつ祖父の市三郎は大人しく撫でられる青と拓一の姿をニコニコと眺めていた。

そのうち青は農耕だけでなく時には人を乗せたり荷を運んだり、石村家に欠かせぬ存在として家族の中に溶け込んでいった。青も非常に石村家を気に入った。成長した拓一は青に乗って駆けるのが好きなようで、市街へのお使いも青に乗ってこなせる。

「なああ耕作う。おめ、そろそろ青に乗ってみるか？」

拓一が青の腹にブラシをかけながら言う。いつしか青の世話は拓一と耕作の仕事になっていた。耕作も、もう青の首を撫でられるくらいの背の高さになった。しかしあぶみを踏んで馬の背にまたがりに行くには少し体が小さい。

「まだ兄ちゃんみたいにはいかんべ」

耕作は小さい頃、青を怖がっていたが今では一緒に畑仕事もするしこうして身の回りの世話もしてやる。恐怖は感じない。むしろ触るとホッと温かみを感じる。黒々とした大きな瞳は凜として、それでいて優しさをたたえているように好きだった。

「ほら耕作、俺が尻を持ってやるからさ」

「ダメだよ兄ちゃん、危ないってば……！」

青はそんな兄弟のやり取りを感じ取っていた。何かしてやれないかと思案し、自ら後脚を畳み体を降ろして伏せの状態になった。

(耕作、これなら乗れる?)

兄弟は伏せをした青を見て驚いた。

「えっ？」

耕作と拓一はしばし固まっていた。

「乗って良い…て事だべか…? それとも嫌…なんだべか」

「いや、青は普段人前で伏せすることは無い。乗れ、つちゆうことでないか…?」

「青…本当か…?」

耕作はおそろおそろ青に跨ってみる。青は自分の背に耕作の重みをしっかり感じ取ってから立ち上がった。耕作の視界がグンツと高くなる、と同時にバランスを崩しかける。

「うわっ」

「耕作っ、ちゃんと手綱持て」

耕作は手綱を握って座り直す。

「の、乗れたあ…乗れたよ兄ちゃん！」

「うん！ 良かったなあ耕作！」

耕作の視界には青の長い首とたてがみがうつる。そしてなんと高い視点だろう。自分の身長からとは違う見え方に耕作は新しい発見を得た気がして胸が震えた。

「ありがとう、ありがとうな青！」

片手で首をさすってやる。青は満足げにぶるると鼻を鳴らした。

それからは耕作は常歩の練習がてら、空いた時間に青に乗って拓一と家の近所を散策した。耕作も普段畑仕事をして筋肉がつき始めているがまだ体重は軽い、まずは馬の背の上に乗る続けることを目標に青をゆっくり歩かせた。かつぽかつぽと、青が足を前へ出すたび前後左右に体が持って

いかれそうになる。耕作は下腹に力を入れ姿勢をシャンと保つように意識する。それだけで最初は精一杯であったが、徐々に青の背に自然に揺られて歩けるようになってきた。それが心地良くいつまでも青に乗っていたい気分だった。

「青と息が合ってきたな、耕作」

「うん、なんとかか…。でも不思議だ、言葉が話せなくてもお互いのこと、何となく分かるようになってきた…気がする」

「だべ。それが嬉しいんだ！」

「うん！ 良いな、馬って！」

二人は笑いあった。

「馬に乗れるといろんな場所に行けるぞう」

拓一は青と随分この辺りを駆け回っているらしく色々なことを教えてくれた。

「あ、あそここの家は今は小豆作ってる。んで、あれは麦だな。あそここの家は柄沢さんち」

「兄ちゃんそれは知ってるよう。それよりさ、あつあれ！ あれ何だべ？」

「あれは、あんずの木だ」

「向こうのあれは？」

「ありや、柿だべ。耕作、ほれ、猫じゃらし」

拓一は道端に生えるふきふきの猫じゃらしをちぎって穂先を青の鼻先に持ってゆく。カプツと青は噛み付いて咀嚼した。

「わっ、食べれるのか青」

「んだ、でも青が食べたらいけない草もあるべな。教えてやつから気をつけれ耕作」

「う、うん！」

青の為だと思つと耕作は目を輝かした。

青は耕作を乗せ、拓一に連れられて色々な道

や川を知り、植物や、他の動物なんかを教えるも
らった。耕作も青を速足で走らせるくらいにはな
った。

「さっすが兄ちゃんは何でも知ってるなあ」

「いや、俺も人から教えてもらったのさ」

「ふーん、そうなんだ？」

拓一は何でも無い風に答えた。

(ふふ、拓一は照れてますよ、耕作)

耕作は青の背に乗ってるから今は拓一の後頭
部しか見えないが、青には横に並び歩く拓一の顔
がよく見えていた。

暫くして耕作もなんとか青に乗って駆足する
ことができた。青はもう耕作が降り降りする時に
伏せはしない。耕作が自分で、背まで一気に上が
れるようになったからだ。

「耕作！ 良いぞー！」

ちょうど通りかかった修平に褒められた。修平
は馬が好きだ。耕作が日々青を乗りこなしてゆ
く姿を見て内心嬉しく思っていたのだろう。

「ありがとう、おじさん！」

耕作はこそばゆい気持ちになりつつ手を軽く
振った。青と家に帰ってきて耕作と青は厩舎で、
一人と一匹だけになった。

「青、今日は褒められちゃった！」

青の首をさすってやる。青は顔を耕作に擦り寄
せる。

(耕作が頑張り屋さんだからですよ。こちらこ
そありがとう。丁寧に乗ってくれて)

耕作は青に合図を送る時、実に絶妙な力加減
で、手綱を引いたり横腹を蹴る、決して雑なこと

はしない。それに馬は走るのが大好きな動物だと
知ってからは、広い草原をただ走り回らせるだけ
の時もあった。畑仕事は力仕事でゆっくりじつ々
り取り組むものだ。青にとってただ走る、という
ことは良いストレス発散になり、ありがたくもあ
った。青は恵まれていることをひしひしと感じて
いた。

やがて耕作と拓一が成長するにつれ、2人とも
学業に仕事に忙しくなりあまり青を連れ出して
構ってやるのが出来なくなった。だが青は寂し
くはなかった。何故なら青は出産をし、今や鹿毛
の母となったからだ。自分の子を気にする時間が
多くなった。

と、思いきや：青のところには時折客がくるよ
うになった。客と言ってもそれは大体難しい顔を
した耕作や拓一だった。

「青、俺な、今日学校で…」

青にこそそり自分の思いを吐露しに来るようにな
ったのだ。嬉しいことも報告しに来るが、大体
は悩みごとや悲しい内容だった。彼らはもう何も
知らない子どもではなかった。青はそれを静かに
聞いてやる。耳を澄まし、感情を察し、話す人間
の顔を見つめる。

(ああ、私が言葉を話せたら…。大丈夫大丈夫、
と言ってあげたい。)

青は石村家や周りの人々が大好きだ。苦しむ
拓一や耕作の顔を見ると心配になる。ただ聞いて
やるしかできない青はもどかしく思った。

(これで、少しはあなたの役に立っているでしょ
うか、ちゃんと聞いています。私はちゃんとあな

たの事を知っていますよ…)

ある日耕作が友人の福子を、連れてきた。秣を
食んでいた青は耳をピンと立てて足音を察知す
る。

「福ちゃん！ こいつが青、あっちの少し小さい
のが子どもの鹿毛っていうんだ」

(あら、耕作がお友達を連れてきたのかしら
…。)

青はゆつくりと二人のほうへ近づいてきた。

「まあ…大きいのねえ」

「うん、でも優しいよ」

「ええ、とても目がきれいだわ。それにこんなに
近くに居ても怖くないわ。思っていたより穏やか
な生き物なのね」

福子の家には馬がない。

「だべ、それに俺青とは喋れないけど、青はたく
さん俺の話聞いてくれる」

「そうなの？」

「うん。誰にも言えないこと…青が聞いてくれ
る。誰かに話したら何言われるかわからん事とか
あと相手が困ることもあるべ。だからそういう時
はさ、青に話してんだ。青が居てくれて本当に良
かったなって思う」

耕作はそっと青に視線を送る。青は初めて耕
作の心の中を知った。

「耕ちゃん…。そうね、誰にも言えないことを一
人で抱えているととても辛いもの…。青、ありが
とね。耕ちゃんのお話聞いてくれて」

そう言って福子は青の首を撫でてやった。
「良い子ねえ」

「青が大人しく撫でられてる。これで福ちゃんももう青の友達だね」

「…ふふ、福子です。よろしくね」

(ええ、福子…小さな手…。よろしくね)

青は福子の手に顔をもたせかけた。

「青も喜んでる」

「そう？ 耕ちゃん分かるの？」

「うん、…えっと、なんとなく」

「でも喜んでもらえてたら私も嬉しいわ」

二人が話していると仕事帰りの拓一も顔をのぞかせた。

「あつ、福ちゃん来てたべか！」

「拓ちゃん、おじゃましてます。今日もお疲れ様でした」

「あ、…はは、ありがとう」

にっこり微笑む福子の笑顔に拓一の顔が少し赤くなる。青はそんな拓一の表情を見逃さない。

(アララ、拓一は福子に特別な感情を持つてるのかしら?)

しばらく3人で青を囲んで談笑した。それは、どこにでもある和やかで平和な光景であった。

だが、その年の夏の夜のことだった。虫の声以外何も聞こえない静かな夜。石村家では既に明かりが消され、青は厩の藁の上で休んでいた。すると人の忍び寄る気配で青は目を覚ます。

(…この匂いは、福子…)

「青…」

福子の声だ。だが暗くて顔はよく分からない。声色からして非常に恐怖や悲しみを抱いていることが感じられた。いつもの可愛らしい福子と様子

が違うことに青は訝しく思う。福子の近くに寄って行った。

「青…今までありがとう。もう会えないかもしれないから…来てみたの…。起こしてごめんなきい」

(もう会えない？ どういうこと?)

「ねえ、青、私ってどうして生きてるのかな…」

(…?)

「青は…耕ちゃんや拓ちゃんといつも一緒に良いな…。私も…」

言葉尻が涙に濡れているように聞こえた。

「ううん何でも無い」

青はよく聞いてやろうと顔を福子に近づけた。すると、福子は青の首に腕を回して抱きついた。

「青は…あつたかいね…」

青は福子の気の済むまでそうさせてやった。何か、福子の顔からぬくみのある液体の感触を感じたが、その瞬間福子は青から離れた。そして、

「これからも耕ちゃん達をよろしくね。じゃあね」

そう言い残して振り返り、そのまま福子は静かに立ち去った。

(福子…)

青は福子の言葉の意味が分からずしばらく立ち尽くしていた。

そして数日後のこと。拓一が厩に走ってきた。

顔を真っ青にした拓一を見て青は何事かと驚いた。拓一はためらいも無く青を厩から引き出し

飛び乗り、ムチをくれた。状況の分からぬ青だったが大きな焦りを拓一から感じ取り、いつもより荒々しく全速力で駆けた。

青はたどり着いた先で、拓一が福子を追ってきたのだと知った。福子は拓一の目の前に居た。しかし福子は拓一の顔を見ただけで、なんの言葉も発せず知らない大きな屋敷に入ってゆく。

(福子！ どうしたの？ 拓一よ、拓一が来たのよ!?)

拓一の震える怒りと悲しみの気配を感じた。

(拓一…)

何をどうすることも無く家路についた。青はがつくり項垂れて背に乘る拓一に気遣い、できるだけ静かに歩を進めた。とぼとぼ歩く中青は考えた。この遠く離れた市街からも福子は帰ってこないのだ、それで拓一は悲しんでいるのだ。数日前に福子が夜中に一人でやって来たのは、きっとお別れを言いに来たのかもしれない。

(私にだけ告げて、拓一や耕作には何も言わなかったのだろうか…)

耕作はただ言葉を受け止めてほしい時だけ青に話しに来ると言った。

(福子も、誰にも何も言われなくなかったのだろうか…)

青の知る人間の世界は、石村家のことと、周囲の人と景色…そのくらいだった。

(あんなに可愛らしく笑う子だったのに…)

青には、福子をとりまく理不尽な事情などまるで知る由はなかった。

そして1年ほどが過ぎた。石村家が一つの悲しみに包まれる。青が天に召された。

(私は食べてはいけないものを食べすぎて、しまいました)

それは突然の事だった、家の者が留守にしている間にかんぬきが抜けて外に出られることに気づいた青はそのまま厩から出てしまい、外に置かれたままになっていた豆類を沢山食べてしまった。

（とつてもとつてもお腹が痛くなつてしまつて…。そんなことになるなんて分からなかった。ごめんなさいね…みんなが気づいて介抱してくれましたが、私はもう耐えることができませんでした）
意識が遠のく青の耳には耕作の呼ぶ声が聞こえた。

（福子…約束を…守れなくてごめんね…。鹿毛…これからはアンタが頑張るのよ…）

青はこれまで大事にしてくれた石村家の人々に感謝をしながら息を引き取った。特に悲しみが深かった耕作は家の裏の川の縁に、青の墓として塔婆を立てた。「愛馬青竜号の墓」と耕作は刻んだ。

「青のこと、忘れないからな」

耕作は拓一と墓の前で手を合わせる。かんぬきをかけ忘れたのは耕作だった。が、最初その失敗から自分をかばってくれたのは拓一だった。隣に立つ拓一には今もそのことについて話せないまままだ。耕作は塔婆に文字を入れる時、青を失った哀しみ、自分の愚かさや弱さ、そして兄への濟まなさと敬いの気持ちで胸がぱんぱんになった。いつかきつと、この弱い自分を克服しなければ…この塔婆の文字にはそんな耕作の想いが目一杯染み込んでいた。

青の墓参りを終えた2人は立ち上がった。

「耕作、青の元気がないななきが聞こえるようだな」

「うん」

そうやって二人は去っていった。

だが二人を見つめる瞳が2つ、そこには残されていた。

「ヒヒーーン」

「？」

「耕作どうした」

「…今、馬の鳴き声が…。空耳かも…」

「本当に青のいななきが聞こえるのか？」

「うん、もうなんも聞こえない。気のせいだべ」

「うん、青はもう居ないんだ」

（耕作、拓一…お墓を作ってくれてありがとう）

青は去っていく二人の後ろ姿を見つめた。

なんと不思議なことに青の意識はまだこの世に残っていたのだ。視覚も働いているようだ。他の誰にも見えはしないし鳴き声も聞こえないようだけれど、青の存在はまだそこにあつた。
（きつと神様が特別な計らいをしてくれたのね…まだあの二人を見守っていたいもの…ありがたいわ）

死んだ青はもう繋がれた馬ではなくなり何処へでも自由に移動することができた。だが青は決して石村家付近から離れようとはせず、それから墓の前で過越し、時折耕作達に大事な誰か誰にも知られることなく彼らの様子を見に行くようになった。

（ああ、鹿毛も頑張っているようね。すまないけどよろしくね）

拓一も耕作も毎日を忙しく送っているようだった。

（つらい時にちゃんと話を聞いてくれる相手はいるのかしら）

彼らは彼らなりに一生懸命生きている、心配しつつもそんな風に青の目に写った。そして数年

の時間が経った。青にはもう時間の感覚はなかったが未だ誰にも知られぬ存在として石村家を見守っていた。

（あらま！家が大きくなって…、もしかして家族が増えるのかしら）

青は鹿毛のことを想いながら、思わず心が弾んだ。

（みんな頑張ったのねえ…）

明るい兆しを感じた。以前のようなどこか暗い貧しさや疲労の雰囲気は薄らぎ、家族が満たされた表情をしている。ああ、もう心配ない、と青はもうすぐ自分が消えても良いような気さえした。

それでも青は消える事なく存在した、それは吉兆にも凶兆にも思われた。

雨がしとしとと降る日の午後のことだった。突然、耳をつんぎくような大轟音が響き渡った。

（ぎゃっ!!）

林からバサバサと鳥が飛び立つ。青はいつもの墓の前で休んでいたところであった。辺り一帯の動物がその衝撃に驚いて混乱している気配を感じた。雷でも落ちたのかと思つたが、何か様子がおかしい。今まで経験したことのない異常事態に動揺した。

（な、何かしら）

青は危機を察知して石村家へ駆けつけた。異様な音は鳴り止まない。

「何か見えたかーっ？」

「何も見えーん」

家人たちが外に出て外の様子を窺っているようだった。

耕作と拓一が裏山に登って十勝岳の方角を確

認している。

「何も見えなかったら、降りて来ーい」

「うーん、今降りて行くう」

青はそのやり取りを聞いて何でもなかったのかとホツとした。自分も来た道を戻ろうと振り向きかけたその時。

「じっちゃーん！ 山津波だあーっ！ 早く山ぎ逃げれーっ！」

その言葉に青はサツと血の気が引いた。

家から良子とキワが飛び出して来る。市三郎らと山へ逃げようとしている光景を見たのが最後だった。後ろからワツと黒とも茶色ともつかない巨大な何かが物凄い勢いで青の体を襲い、突き抜けて行った。

(!?)

それは泥のようなものだと言は感じたが、青の目は何を捉えることもできない。とてつもない速さで前方へ何もかもを押し流してゆくのだ。木々や岩、瓦礫が周りを通り過ぎてゆく。そして人影をも見た気がした。青は驚いて一時思考が止まった。

(ま、待って…市三郎たちは…？ 家は…？ 鹿毛は…？ とにかくここから出なくては)

今の青にはこの世の物理現象が作用しない、自分の意志で泥の流れから抜け出し耕作と拓一が居るはずの山の中まで一目散に駆けた。細い山道の途中に二人は居た、しかし。

「死んでもいいっ！ 耕作、お前は母ちゃんに孝行せっ！」

そう叫んで拓一が目の前で濁流に飛び込んで行ってしまったのだ。

(そんな!?)
恐らく市三郎らが流され拓一は彼らを助けに

向かったのだと言は察した。上から見た周囲の光景は今まで一度たりとも見たことも想像したこともない、泥の洪水であった。青は絶句した。木々や家がなぎ倒され、人が流され…そこには馬や豚などの動物も。

(ああ…ああそんな！ 私のもがら達も！ これではみんな死んでしまう！)

気づいた時には耕作を残し青は泥流目がけ駆けて行った。

(皆、ど！ 返事を…)

青は流れる倒木や家の屋根を器用に飛び移りながら前に進み家人を探した。

(だめ…全然分からないわ…。拓一…拓一だけでも！)

拓一は市三郎たちよりも遅れて泥流に飲み込まれていった。流れに沿って探せばまだ追いつけるかも知れない。青は全速力で駆けた。

「ハアツハアツ、がぼっ…」

その時拓一は必死にもがいていた。市三郎らを助けに行こうとしたが流れに身をとりまわられて体の自由がきかない。それどころか少しでも気を抜けば自分が溺れ死んでしまう。絶対に、じっちゃんを、ばっちゃんを、良子を…助けなければ…しかし拓一の屈強な意志も虚しく泥流は全ての生を等しく無力にした。

そんな中、青は拓一を探し回った

(泥を被ってしまったて誰が誰だか分からない…)

その間にも人々が、馬が、木が岩が流される。生命が失われてゆく…全てを助けたかった。それでも心を鬼にして青は拓一を見つけることに注力した。

「ぐうっ…」

拓一はもはや気力でもがいていた。時間にしていくらも経っていないはずなのに体が重くて殆ど動かない。巨大な岩石や流木に激突する可能性もある。これでは救助どころではなく助けを求めると同じ状態であった。

(絶対に…ここで…俺が死んだら…いかん…)

もう限界か、そう思われた時、拓一に声が降り注いだ。

(拓一…そう、あなたはまだ死んだらだめよ！)

「えっ…？」
拓一はその瞬間、ガンー！と何かにぶつかりその強い衝撃で気を失った。

青は駆けゆく途中途中で生者の意識の声を聞いていた。

「助けてくれー!!」
「痛い！ 苦しい！」

「死にたくない!!」

辺りはそんな悲痛な叫びで埋め尽くされていた。その中に、諦めない意志を持つ拓一の声を感じ取ってそれを頼りに辿ってきたのだ。拓一を見つけた青は、溺れかけていた体をなんとか流れの弱いほうへ引き寄せた。しかし、早くこの流れから抜けなければいざれ衰弱して沈んでしまう。そこで見つけたのが目の前に迫りくる桂の大木だった。

(この人をお願い!!)

泥流の力が今この場の全てを支配している。拓一に申し訳ないと思いつつ、この泥の圧力に唯一負けていない大木に彼を任せるより他になかった。拓一は大木にぶつかり、抱え込まれる形で流れか

ら身を守られた。衝撃で気絶したようだが息を
確認した青は駆け戻った。

(耕作！)

今は生きている者を一人でも多く確かめたか
った。来たルートを戻って耕作が居たはずの山へ
来た。同じ場所に人影が見える、耕作だ。ホツと
すると微かに知っている匂いを感じた。

(誰か居るの…?)

匂いをたどると大木がえぐれたくぼみの中に
人間のような塊があった、しかもそれは…

(ふ、福子じゃないの…あなた、福子ね！)

全身が泥にまみれて見た目では判別がつかな
い。だが青は過去に記憶した心を通わした人々の
匂いを忘れていなかった。

「う…」

福子がうめいた。生きていると察知した青は必
死に福子の意識に呼びかけた。

(福子諦めないで！)

(だ、誰…誰なの)

(まだあなた生きているの、助かるわ！)

(生きて…? いいの…、もう死にたいの…)

(だめよ！ 気をしっかりもつの上)

(どうして…どうして生きなければならぬの
…)

青はハッとしたり、あの別れの夜と同じ問いだっ
た。福子はずっと助けを求めてたのかもしれない。
青は福子に必死に訴えかけた。

(あなたの大事な人がまだ生きてるの！ 会い
たいでしょう？ 一緒に過ごしたいでしょう!?)

(え…どういう…と…)

(ね、福子、耕作も拓一も生きてる。生きて皆
に会いましょう?)

(…もういいの)

青はどうしても死に呼ばれそうになる福子を
勇気づけたかった。

(あの夜私のどこかに来てくれた…！ 本当は
生きたいのしょう!?)

(えっ…!? あなたは…)

(言うのよ、さあ、助けてって…！ きっと耕作
が迎えに来るわ！)

(耕ちゃん…?)

(早く！)

福子らしき泥に覆われた人間は口をばくばく
させて呟いた。

「た、助けて…」

最初はか細い声だった。

「助けて…助けて…!」

(…私、本当に生きたいの…?)

そう考えた途端に怖くなって声が出なくなる。

(諦めないで福子、お願い！)

(でも…)

(素直になるのよ！)

すると突然それまで自分の中に押し殺してき
た「生きたい」という心の叫びが口をついて出た。

「助けて…!」

そうして青は存在の一切がそこで消滅した。

十勝岳大噴火、1926年5月24日に起
きたその大災害により美しい自然、人の営みは突
如として抉り取られた。生き残った者たちは、ど
うしようもない怒りや哀しみ、淋しきや悔しきを
胸に前へ進むか、この地を捨てるか選択を迫られ
た。石村家もまた同じ2択を迫られ、前へ進む道
を選んだ。石村家はあの泥流から拓一が生還し、
母の佐枝も帰郷、その後耕作との三大家族とし
て生活してゆくこととなった。そして福子も無事

耕作に助けられ九死に一生を得た。兄の国男は
兵隊に行っており、ひとりぼっちにはならなかつ
た。だが家は流され深雪楼の枷に縛られ続けてい
た。

拓一はこの上富良野の地でまた農業を復活さ
せようと考え、かつて三重団体の者が住んでいた
家に一家は居を移す。そこには厩もあつた。

耕作は新しい住まいを一通り確認して、空っぽ
の厩を見つけその前に佇んだ。かつて馬がいたか
どうかは分からない。だが被災した地域ではたく
さんの家畜が犠牲になった。

「鹿毛…」

あの時考える暇もなかったが、おそらく鹿毛も
濁流に飲み込まれそのまま亡くなったに違いない。
亡骸がどこにあるのかすら分からない。空っぽの
厩を見つめる耕作に気づいた拓一が寄ってきた。

「ちょうど厩もあつて良かった」

「兄ちゃん。馬はどうするんだべ」

「うん、買うよ。博労さんがそのうちここに来
るだろう」

「そっか、新しい馬か…」

「復興するにも馬がいなきゃな」

拓一は自身が泥流に流され気を失う寸前、誰
かが自分に呼びかけたことを思い出す。その声は、
死んではならない、と力強く叫んでいた。あの時
自分だけ生き残るくらいなら…と考えていたが、
復興という大仕事を目の前にした今、自分は確か
に死んではならなかつた。拓一は感じている、生
きて果たず役目を見つけたからだ。今ではあの呼
びかけに「生かしてもらった」とすら思う。

(あの声の主は一体…)

あんな凄まじい状況の中で声を掛けられた人間
が居ただろうか？ もしその声の主が居たとして、

その人は無事だったろうか？ 何故自分だけ、偶然大木に引つかかったのか…真相は何も分からなかった。

自分が生き残った事を知った時は自身を責めたが、死んではならないと呼びかけられた記憶が常に頭のどこかで反芻され、それが次第に拓一を前向きにさせていった。今ではあの声の主ならば今の自分をきくと理解してくれると、勝手に仲間のように思っていた。

拓一が無言で考えていると、

「鹿毛が…可哀想だったな」

耕作がぼつり呟いた。

「だな…逃してやることもできなかったし…きつと苦しかっただろうな…」

「うん…青の墓ももう残っていないだろうね」

「あ…」

拓一はその時初めて気づいたようだった。

「な、兄ちゃん、俺もつかい墓作ってもいいかい？ 今度は青と鹿毛、一緒に墓だ」

「…そうだな、一緒に眠らせてやろうな」

拓一は耕作の優しい心に触れ、そして死んでいた者たちがどんなにか無念だったかを感じ一層復興を胸に誓った。

それから拓一は懸命に復興への道を走った。村民大会では復興を志す演説を行った。

「30年前、1本1本の木を伐り倒し、あの土地を肥沃な畠に変えた祖父母たち、その苦労を思えば、ぼくは、復興せずにはいられないんだ！」

拓一の真実こもった言葉に場は圧倒された。

拓一は来る日も来る日も流木と泥の撤去作業に汗を流している。先の見えぬ仕事であった。そしてこの土地で再び農業ができるとは半信半疑

であった者達の目は尚冷たかった。耕作は、あの村民大会での兄を誇らしくも思い、不安にも思っていた。

（兄ちゃん、どうして兄ちゃんがそんなに苦勞をしないかならないんだ…）

村民大会からほどなくして石村家は新しい馬を迎えた。連れ帰る途中、耕作は青に触れてみたが青はしきりに頭をふる。

「ふふ、前の青と違ってきかんこだ」

「なんだ耕作、嬉しそうだな」

「うん、俺、馬が好きだ。前も青と鹿毛がずっと一緒だったし…、その、青には内緒の話とか聞いてもらった」

「なに、耕作もか」

「え、兄ちゃんも同じか」

「あの青はなんとなく、話を聞いてくれる気がしてな。ま、こっちは青は分からんけども」

それから少ししんみりして黙った。

「俺、前の青が居たらきつと今の兄ちゃんの事話すなあ」

「何てさ」

「うーん、兄ちゃんがまたここで農業をしようと頑張るのは立派だと思う。でも、良く思わない人もいる…それにここが元通りになる保証も無いんだ…しかもまた噴火が起きるかも。それなのになしてそこまでするんだろう…って…」

拓一は耕作が頭の中であれこれ考えて心配しているのだな、と思った。

「じゃあ俺も青に言うぞ。俺なあ、田んぼも作りたいけど…ただ好きなんだあの景色。草っぱらがあつて、山があつて、風が気持ち良かった。そんな畑が広がってたなあ。皆で遊んだなあ、畑を耕したなあ、その後の飯は美味かった…」

拓一は昔を偲ぶように間を置いた。

「青も気持ちよきそうに走ってたなあ」

「…」

「でもな、結局のところ、それはじつちゃんやばつちゃん達が作ってくれた景色だ。あつて当然のものではなかったんだ」

拓一は流木の残る泥の海を見渡して言う。

「一度失くして気づいたよ、胸がちぎれそうなほどつらい。あれは凄く大事なものだだったんだ」

「うん…」

「俺はな、結局皆のこと助けられなかった。しかも日進の沢ももう無い。だから代わりに俺は、またここで生きていきたいと思える場所を作れたら良いなと思ってる」

拓一は力強く話した。

「勿論、動物たちもそのほうがいいだろう？ 田んぼがあればトンボもたがめも暮らせる」

「そつかあ。うん、俺もそうなら良いなって思う…沢で暮らしてた時が懐かしいなあ…」

「耕作、俺は青に話してるつもりって言ったべ？」

「あ、いけね」

「ははは、いいんだ。これからは俺に言えば良い。ちゃんと話すべ」

「うん、ありがとな兄ちゃん」

耕作は拓一が何か大きな重圧に潰されそうになりながら、苦しみながら復興をしているのではないかと思いついていた。だが、拓一はただ、馬や畑が好きで、その中で家族とあたたかく暮らす光景を頭に描いていたのだ。土を作り、稲を実らせるのはその一歩にすぎないのだと、耕作は拓一の胸中を悟った。それでもその一歩はとてつもなく遠く難しい一歩だった。

耕作は青の塔婆に刻んだ文字に込めた想いを思い返した。拓一は堂々と、黙々と自身の道を行く。耕作はあの時自分の失敗を庇ってくれた拓一の清い強さを今も感じている。今こそ自分の弱さを克服したい。耕作は兄の背中を見ながら、自身もこの地の為に尽くすことに励んだ。

そしてある時耕作は呟くように拓一に話しかけた。

「なあ、兄ちゃん。もしも、もしもだよ。ここが良い土地になったら、そんな時は福ちゃんも一緒に良いな」

拓一は一瞬固まって、

「そ、そういうのはめったに言うもんじゃない」とうろたえた。

「なんでも話せて言ったじゃないかあ」

「そ、そうだけども…」

急にパイと向こうをむいてしまった。

(全く兄ちゃんてば…素直じゃないんだからな)しかし頼もしい兄、優しき母、そして福子…大事な人々に蘇った大地を見せてやれたらどんなにか幸せか。その気持は2人とも同じだった。

冬になった。深雪楼で暇を貰えるようになった福子が新しい石村家に泊まりに来てくれた。色々な話をして、あっという間に一晩が過ぎた。

深雪楼へ戻る日の朝。昨日拓一が外から馬で帰ってきたことを察したのか、

「新しい馬を買えたのね、良かったわ」

と福子は話した。拓一は福子に青を見せてやった。

「うん、また青だよ」

「そう…前の子が思い出されるわね…」

「実は耕作とお墓を作ったんだ、骨も何も無い

けれど…青も鹿毛も忘れたくないから」墓のことを話すと福子は墓に手を合わせたと言い出した。拓一は墓のある場所へ連れて雪をかき分けて墓の目印である塔婆を見つけた。

「これだ、これ」

「ああ…久しぶりねえ、青、鹿毛」

福子はしゃがんで熱心に手を合わせた。

「ありがとう。福ちゃん、覚えてやってくれて」

「忘れるわけないわ…青に感謝してるの、私」

「そう…」

「あの頃…良かったわねえ。みんな居て、楽しかったわね」

「あの頃」がまだ福子が日進の沢で暮らしていた時のことだと拓一は思った。福子が遠い思い出を大事そうに目に映している姿を見て胸が痛んだ。

「うん、本当に」

すると遠くのほうから拓一を呼ぶ声が聞こえた。

「あ、いけね、今日は朝から流木引っこ抜かないといかん」

「拓ちゃん、頑張つてね」

「うん、福ちゃんまた。体につけてな…」

拓一は若干バツの悪そうに走っていった。福子は立ち上がりその背中を見つめた。福子は昨晩、結婚でもしようかと考えている、と皆の前でこぼした。すると皆が困惑する中、

「今より幸せになれるならそうしたら良い」

と拓一は言い放つたのだ。それは拓一なりに必死に福子のことを一番に考えた言葉だった。だが福子は試すような言い方をして、拓一を傷つけてしまった気がした。いつぶりに家庭の日常のあたたかみにあたって、幸せ反面、これが只一時の

安らぎに過ぎないことを思い自分の卑屈さが顔を出してしまったのかもしれない。自分に嫌気がさした。

誰も居なくなった墓の前で、福子は再びしゃがみ込んだ。

「ねえ、青。あなたでしょう。あの時私に話しかけたのは…」

話しかけてみたが当然なんの返事も無い。だが

福子は小声で続ける。

「あの夜…こっそり厩へ行ったのは青しか知らないもの…。私達、お喋りできないと思っていたけれど、本当は心の中で青はお話してくれていたのねえ。ありがとう」

福子は泥まみれで意識が遠のきそうになった時のことをずっと忘れられずにいた。恐怖と混乱と、忍び寄る死。あの時声を出そうとしなければ耕作はきつと気づかず、自分はそのまま息絶えていたに違いない。

「青は、私を生かそうとしてくれたのねえ…こんな私を…」

青を撫でるような手つきで塔婆をさすった。

「私、この通り五体満足元気よ。…それで、元通り深雪楼にいるわ」

福子はスーツと冷たい空気を吸って一呼吸おいた。

「ごめんねえ青、私、生きていても何も出来ないの。それどころか、拓ちゃんのこと苦しめてるの。ダメねえ」

福子は笑い泣きのような顔になった。青の気持ちを決して責めたくは無いが、それでも自分の存在への疑問は拭い去れず生き残った意味を考えるところだった。

(あなたの大事な人がまだ生きています)

あのときの言葉が脳裏にこだました。

確かに、耕作や拓一は生きていた、彼らの母である佐枝にも再会し家庭の中に快く迎え入れてもらった。兄もいる、節子もいる。福子にとってはそれだけでも十分過ぎる奇跡であった。

そして本当は福子は生きたいのだと、あの時の青は言っていた。福子の唇は震えた。

「だめよ…私は生きたいと思つたらいけないのよ。生きたいと思うことは、死のうとするより苦しいの…」

ぼとりと雪の上に涙が落ちた。雪はスツと溶ける。

「もう十分よ青…私はもう、居ないほうが…いいのよ」

福子は塔婆から、もしかしたらまた青が語りかけてくれるかもしれないとじっと待った。だが当然そこには無機質な物体があるだけで辺りは遠くの人声以外静けさに満ちていた。福子は小さくため息をついた。福子は遠い昔を、日進の沢を思い出していた。あの頃は、嫌なことがあつたつて、それだけじゃなかった、学校があつて、友達がいる、笑うことができた。生きたいとも死にたいとも考えたことはなかった。

深雪楼での日々が福子を変えた。借金、遊女…もはや死ぬことも生きることでもできない。それは福子の人生を大きな苦悩の渦へ突き落とした。そして福子は自分の心を見ることをやめた。無感情であることを選んだ。

だが泥流に流されたあの時、初めて「助けて」と言えた。ただの人間の本能に過ぎなかったと言えどそれまでだが、福子は逆にあの状況にあつて理性ではここで人生が終わっても良いと考えていたのだ。

だが青が素直になれと…、呼びかけたあの一瞬、自分の言葉で助けを求めた。

(…自分にはそういう気持ちもあるんだ)

福子は天を仰いだ。生きる、という事は自分の中でもう終わりにしていたつもりだった。しかし目をそらしていた自分の心には、まだ希望を求めたい気が存在しているのだろうか。

(生きたいと思つても良い世界が…ほしい…)

「また来るわね。青…」

と福子は立ち上がつて墓をあとにした。深雪楼に戻ろうととぼとぼと歩き出し、視界に広がる雪原では男衆が流木の片付けを必死に行っていた。その中には拓一もいるのだろうか。過酷な道ではあるが皆ここに緑を芽吹かそうとしている。村民大会での拓一の事も耳にした。

福子は泣けてきた。自分が自由の身なら、きつと協力していただろう。だが今の自分は、大事な人が居ようとも理想の世界があろうとも、ただの借金を抱えた遊女でしかない。

もしもここに稲が実る頃、自分だけはまだ遊女をしているのだろうか。もしもこの地が生まれ変わつても、自分の生き方は変わらないのだろうか。

(ああ…私もその地に立つ一人になりたい…)

だがもう背中を押してくれる者も、心の内を黙って聞いてくれる者もない。唯一、青が気づかせてくれた自分の心の可能性が手のなかに残った。

(守ろう。自分の心を)

福子は一度流しそうになった涙をこらえ雪を踏みしめた。

その後、福子は月に一度の暇に石村家にやって来ては青と鹿毛の親子の墓を世話し続けた。それは福子が自分との対話を深めてゆく時間でもあつた。そんな福子を拓一と耕作は静かに見守り、一緒に墓に手を合わせた。墓は自然と拓一、耕作、福子の3人によって守られていったという。

復興はそれから長期に渡り続いた。人々の生きる道も、それぞれの形で続いていった。

そしてその道にはひっそりと、一頭の馬の存在があつた。

その馬は、人々に愛され、生命の躍動を伝え、言葉無き交流で互いの心を温め合い、人を孤独から守った。また、その馬は死して尚人の歩みを助け、泥流という恐ろしい自然の猛威の中、人を救った。

それはもはや家畜ではなかった。人間の仲間だった。これからも人々は困難に出会うだろう。だがもしも挫折そうになった時には、きつとあの一頭の馬の優しさが、勇気が、小さな礎となつて人々をそつと支えてゆくだろう。

小菊

(ペンネーム) ちゃちゃつとGPTT



今日は本当にびっくりしちゃった。

ええ、私昼間にお豆腐屋さんへお使いに出たじゃない？ そしたらそこに耕ちゃんが働らいていたの。ううん、一日だけお手伝いだった。毎日働らいているなら、いつでも会えたのにね。

そうそう、いつか耕ちゃんに上げた白い石、まだ持っていてくれたわよ。返すって差し出されたけど、私、断ったの。それでいいのよね？ よかった。私もそれは耕ちゃんに持っていてもらった方がいいと思うわ。耕ちゃんにはいつか必ずいいことがあるでしょうけど、私が持っていたんじゃない？

そうね、少しだけ背が伸びてたかしら。でも変わってなかったわ。優しくって純粋なまま。だって耕ちゃんたら私に「いつ家に帰るの？」なんて言うのよ。毎日父ちゃんの借金が増えてるって聞いてなかったら「そのうち帰れるかな」とでも言えたかしら。でも私泣きそうになっちゃって。さよならして帰ってきたの。

また会えるといいなあ。ね、あなたもそう思うでしょ？

ねえ、今日は耕ちゃんが訪ねてきてくれたのよ。見ていた？ そう、よかった。いつかあなたにも会わせてあげられるかしら。ええ、そうなの、お母ちゃんからの荷物を届けてもらっただけなんだけど、懐かしいお話しもできて楽しかったわ。

覚えてる？ 小学校の学芸会の「したきり雀」。お爺さん役の耕ちゃんが居なくなった雀を探しに

来てくれたじゃない。今日耕ちゃんが来てるって聞いて、急にそれを思い出したの。もしかして耕ちゃんが私を迎えに来てくれたんじゃないかって助け出してくれるんじゃないかって。

子供みたい？ ふふ、私ね、思わず耕ちゃんにそのまま伝えちゃったのよ。いやだ笑わないですよ、ずっと前からあなたも言っていたでしょ、大人になつたら耕ちゃんが迎えに来てくれるって。いいのよ、そう信じて生きていきましようよ。

でも耕ちゃんたら何て言ったと思う？

「ふーん」だって。ふふふ、仕方ないわよ。耕ちゃん昔からそういうところ鈍感でしょ？ だから私も安心してそんなこと言ったのよ。絶対気づかないもの。でも私が正面から「好きよ」なんて言ったら、耕ちゃんどんな顔するのかしら。えっ言わないわよ、きつともう会ってくれなくなるもの。それにね、それはいつかあなたが言うべきなのよ。ね、福ちゃん。

おかえり福ちゃん。父ちゃんの具合どうだった？ ……そう。仕方ないわね。でもお陰で博打もしないしお酒も飲まなくなっただけでしょ？ 借金がこれ以上増えなければいいんだけど…

そう、耕ちゃんたちにも会えたのね。全部手伝ってくれたの？ ふふ、どうりで私、日焼けもしてないし体も痛くないと思ったのよ。え？ 福ちゃんは畑に出たかったの？ そうね、昔みたいに皆んなで泥だらけになるのもいいわよね。日進の沢にいた頃みたいだね…

あら、そろそろお店に出る時間。じゃあね、福ちゃん、また明日…明日もきつとまた、目が覚め

るから…安心して眠ってね、おやすみなさい、福ちゃん。

ねえ福ちゃん、今日ね、深城の旦那さんから「金一の嫁になるか？」なんて聞かれたのよ。本当にびっくりしちゃった。嫁になれば店には出なくていいって。でも嫌なら嫁にならないでいい、その代わり店に出るって。もう何がなんだかわからないわ。金一さんからも直接言われたのよ。将来は深雪楼のお内儀だぞって。

私、どうしたらいいのかしら。十四歳のあなたに聞くことじゃないけど、わかっているけど、自分では決められないわ…でもね、今度耕ちゃんに聞いてみようと思うの。耕ちゃんお嫁に行けって言わかしら、もしかして行くなって言ってくれるかしら。

福ちゃん私ね、お嫁には行かないわ。そう決めたの。耕ちゃん？ 耕ちゃんはね、うん、耕ちゃんね…言ってくれなかったわ。お嫁に行くなって。でも私思ったの。

金一さんに嫁げば借金も無くなるし、お店にも出なくていいのよね。梅毒で体が腐って死んじやう心配も無くなるかしら。

でもね、深雪楼の、深城の嫁になるのよね。いやな思いをしたその場所で一生、好きでも無い人の傍で、好きな人を想うこともできないまま、節子さんのお母さんみたいに突然追い出されることに怯えながら暮らしていくのよね。

そんな風に生きることの意味があるのかしらって、私思ったの。

でも拓ちゃんは、拓一さんはね、私のこと、私たちのことすごく想ってくれるのよ。ずっと前から、私たちのこと、すごく。もちろん拓一さんのお嫁さんになんてなれやしないわ。私には借金があったくさんあるし、何より拓一さんが本当に想っているのは拓ちゃん、私じゃないんだから。私みたいな穢れた女、相応しくないの。だけどね、いつまでかわからないけど、拓一さんが私を、いえ、拓ちゃんを想ってくれている間は、私も、その気持ちを想って生きた方が幸せな気がするの。一生じゃなくっていいわ。深雪楼にいれば一年後、五年後に生きていくかなんてわからないもの。

だけど拓ちゃん、私いまでも胸が高鳴っているの。わかる？ だって私、自分の生き方を自分で決めたんだもの。生まれて初めてかしら。あと数年で終わるかもしれない人生でも、自分でこう生きるんだって、そう、自分で決めたのよ！ 応援してくれる？ 拓ちゃん。拓ちゃん？

ねえ、拓ちゃん、聞こえてる？ ねえ、拓ちゃん、拓ちゃん、どこななの？ 返事して。私どうしたらいいのかしら。節子さんが深雪楼から、深城から逃げろって言うの。逃げられるって言うの。旭川に逃げて、沼崎先生に匿ってもらうんだって。

逃げたら自由になるって…節子さんは言うけど、自由…？ 自由っていったいどうすれば、何をすればいいの？ 自由？ 旭川で、自由に、そう言われても私どうしたらいいの？ 自分で決めるっ

て…自由って、こんなに怖いことだったの…？

ねえ拓ちゃん、わかっていたのよ。あなたは居ないって。はじめてお客さんの前に出た時に、ううん十四の秋に売られてきた時に、あなたは消えてしまったのよね。わかっていたのよ。でもあなたが僅かでも、欠片でも残っていたら、いつか私も拓ちゃんに、深雪楼の小菊じゃなく、日進の曾山福子に戻れる日が来るんじゃないかって、どこかでそう思っていたの。

でももう、乗ってしまったの。旭川に向かう汽車が走り出してしまったの。もう戻れないわ。戻りたくなんかないけれど、どうしてこんなに恐ろしいの？ そうするって、私が自分で決めたのに。

旭川に行けば日進の曾山福子でも深雪楼の小菊でもなくなるのよね、でもそれがこんなにも恐ろしいことだったなんて。その上、拓一さんのお嫁さんに…？ 拓一さんにあんな大きな借金を背負わせて、深城の旦那さんの恨みを買って、私が逃げた後に残った子たちは…同じように売られてきた子たちが、私が逃げたせいできつと酷い目に遭うっていうのに、私だけが旭川で幸せに…？

それは、幸せなの？

わからないの。助けて。あと何年か…ただ拓一さんの気持ちを抱いて死んでいこうって決めた時は、あんなにも清々しかったのに、新しい罪を背負って、あと何十年も…？ 私どうしたらいいの？ でも、ああ、節子さん、ハンカチを…。拓一

さん！ 耕ちゃん！ 小母さんも…皆んなあんなに笑顔で、祝福してくれているのに…私も…笑わなきゃ…怖いなんて、口が裂けても言えないわ…笑わなきゃ、幸せにならなきゃ…拓ちゃん、拓ちゃん、ありがとう、私、行くわ。恐ろしいけど、行くわ。行かなきゃ…。

さようなら、ありがとう、拓ちゃん。

被災は因果応報なのか

(ペンネーム) あめさかつ



1秒で約15m。大正15年の十勝岳の噴火で、上富良野町の日新地区に流れ込んだ泥流の速さである。1926年5月24日、十勝岳が噴火した。噴火口付近の雪を溶かして大量に水分を含んでいるため、勢いが速いのだ。さらに山の斜面を下る過程でなぎ倒された木々や、硫黄を含んだ酸性の土砂も運ばれてきた。植物は育たない。上富良野の被害額で言うと、当時の年間財政規模の17〜18倍にもなった。起債したところで、また作物が実る地になる保証はないため、村内でも復興賛成派と反対派が対立した。それでも拓一は、祖父母らが30年かけて開拓してきたこの土地を手放すことができず、吉田村長とともに、復興に命を懸けるのである。

祖父母も、三重から入植してきて「勤勉」なことで知られた「三重団体」の多くも、一瞬にして泥流で命を落とした。30年間、コツコツと真面目に働いてきた結果が、この有様である。それなのに、普段悪事をはたらく人が生き残っている。耕作はむごい、馬鹿くさいと思うのだ。「因果応報」というが、泥流で命を落とした人たちは、行いが良くなかったから死んだのか。耕作は納得できず、モヤモヤと考え続ける。

近年も、日本各地で自然災害が起こっていて、犠牲者が出ている。東日本大震災の被災者や西日本豪雨の被災者は、「日頃の行いが悪かったから」罹災してしまったのだろうか。私自身は、13

歳の時に母親を、19歳の時に父親を病気で失った。私の母や父が、もしくは私自身が、前世で相当酷い行いをして、その償いをしないといけないのだろうか。そのように考え、納得したふりをして、生きるしかなかった。遺された罹災者も、きっとそうだろう。

しかし、地球の歴史から見ると、噴火や地震や大雨は、咳やくしゃみのようなものかもしれない。いつ起こるか分からない生理現象である。明日再び、十勝岳が噴火するかもしれない。どこかで大きな地震が起こるかもしれない。

「因果応報」という概念で解釈するならば、生まれてきたから、必ず死があるのだ。どのような死かは問題でない。人間として生まれたからには、長くて100年程度の命である。地球の歴史から考えると一瞬である。そんなちっぽけな存在であるが、自分の心に正直に、自分らしく生きていたなら、いつか終わりがきたときにも人生を全うしたと納得できるのではないだろうか。

「泥流地帯」で描かれている噴火の場面も、多くのページが割かれているわけではない。

大正時代の男女の恋愛の様子や、親子関係について、今とは違ったのだと新たな発見もあった。

父親の借金のために売られた福子は、自分を取り戻し人間らしく生きていくために、最後に遊郭から脱出する。実の父を軽蔑し、義母とともに家を離れた節子は、自分で決めた夢を実現させるために旭川で住み込んで働き、産婆を目指す。現代より多くの制限があった時代に、勇気をもって自分のポリシーを貫いた登場人物たちから、学

べることが沢山ある。生を受けた者が必ず迎える最期のときまで、自分らしく尊厳をもって生きることの大切さを気づかせてくれるのである。

雲の切れ間から

(ペンネーム) 天音



私が「泥流地帯」を初めて知ったのは、たまたま目にしたとあるTV番組がきっかけだった。

どの局かは忘れたが、タレントの佐藤江梨子さんが富良野の地で「泥流地帯」縁の地を訪問するという内容だった。

読書家としても知られ、自らも文章を認める佐藤さんが紹介する作品ということもあり興味を抱いた。

30年かけて開墾された土地が、それまで当たり前にあった日常が、家族が、希望が、泥流によって一瞬で押し流された。

後に残ったのは硫黄に塗れた死んだ土地だけ。そんな中にあっても決して希望を捨てない拓一の姿が強く印象に残る。

そして登場人物の人間性―祖父の市三郎、拓一や吉田村長、深城や武井の母―が、コントラストのようにくっきり分かれているのも印象的だった。

ありきたりな表現しか出てこない自らの貧相な語彙力に失望してしまうが、この2作を読み終えて思うことは、今のこの世の中に生きる人々が失いかけているものを、改めて気づかされたような気がした。

例えば耕作が拓一に障害が残るほどの大怪我

を負わせた父兄に対する対応。

これが今の世なら、教え子の父兄だろうがお構いなしに被害届を出し、法的に償わせようとするのがまず一般的だろう。

もちろん、何の罪もなく日々懸命に生きている兄に、一生ものの障害を負わせた相手に対する処罰感情や、教師として子どもたちを教え導くという立場の間で耕作は揺れ動く。

そんな兄弟に対し、おじの修平はなぜ訴えないのか、悔しくないのかと感情的に詰め寄るが、ここは個人的には大いに共感できるシーンでもあった。

自分でもきつと同じ感情で、同じ行動を取るだろうと思っただけからだ。

しかし結果として耕作は、教え子の心情を優先し、訴訟を断念した。

他者への思いやり。

無償の奉仕。

現代ではもはや死語に近い言葉であり、悪い意味で解釈されることが多い言葉に変化してしまっているように思える。

だからこそ、現代に生きる私たちは、この物語・登場人物に強く惹かれるのだろう。

「泥流地帯」「続泥流地帯」は、厚い雲の切れ間から光が差し込むように、物語が進むにつれ、登場人物たちを取り巻く環境に段々と明るい希望が見え始める、そんな物語だと感じる。

泥流による悲惨な悲劇からの復興、耕作と節子・拓一と福子のそれぞれの未来。

原作では福子が深雪楼からの解放を示唆されるシーンで幕を閉じるが、その後の登場人物たちの明るい未来を願わずにはいられない。

蒸気機関車の窓から翻る白いハンカチ。あれはきつと「希望」の象徴なのだろう。

のこされた人

(ペンネーム) ニモ



坂森四郎は寝返りをうって深く息を吐いた。もう朝方になるがまだ起きる時間ではない。隣からは父親の大きい寝息が聞こえてくる。四郎は目を閉じたまま先ほどまで見ていた夢を思い出し、続きを見ようと試みた。しかし寝ているような起きているような頭では、自然に夢の続きを見るのは容易ではなかった。すると瞼の裏に懸命に思い浮かべていた母と兄たちと弟の姿が、突然上のほうから押し寄せてきた土石流に飲み込まれて見えなくなってしまう。

四郎はハッと息を呑んで目を見開いた。心臓が早鐘のように打っている。布団をはねのけて起き上がり、暗い部屋じゅうに目を走らせたが、そこにはもう弟の姿はなかった。

四郎は長く息をついた。夢の中で弟の五郎はニコニコ笑って走っていた。兄たち三人も大きな声を出しながら笑ったり走ったりしてみんなで風揚げをしていたのだ。母も父もいた。家族全員が同時に健やかに生きていた時などなかったのに、そんな夢を見た。

父親は疲れきっているのか、四郎が身動きしても起きる気配がない。時間を見て起こしてやらなければ仕事に遅れるだろう。

(夢の中にいたかったなあ)

ずっしりと鉛を飲んだように重い体を持ち上げ、四郎は立ち上がって布団を畳んだ。

高等科二年の四郎は、去年弟が死んでからずっと勉強に身が入らない。成績は下がりつぱなしだったが父親は何も言わなかった。何をしていた

もふと力が抜けたようにぼーっとしてしまう。そんな時友達は気づかなくて、あまり四郎に構わなかった。今も休み時間にも関わらず、四郎は誰とも話さず窓の外を見つめている。

下級生たちが賑やかな声をあげながら校庭で遊んでいる。手足の先まで楽しさに溢れているような走り方をする子たちが見える。四郎は今朝見た夢を思い出した。五郎もあんなふうには走っていた。自分より年若で死んだ兄たちも、成長した姿で走って風を揚げていた。風は空高く揚がり、母も父もうれしそうだった。

(どうしてみんな死ぬ?)

母親の死は長い間受け入れられなかったが、父と弟が同じ悲しみを負っていることが四郎の支えだった。特に五郎は死ぬかと思うほどの病を超えて生き延びた経験があり、四郎にとってははずっとそばにいてくれるかけがえのない弟だった。

(五郎は死ななくてもよかった)

あの土砂降りの日、五郎は大きな被害に遭った地域へと向かっていて泥流に飲まれた。一変した景色を見て四郎はあまりの恐ろしさに膝ががくがく震え、座り込んでしまった。これに飲まれたのなら五郎は絶対に助からないとすぐに脳が告げた。そしてその通りになってしまった。突然の天災だった。避けられるすべは人間には持ち得なかったと見ただけでわかる。しかし偶然のようにそこに居合わせた五郎は、五郎だけは、それに遭う必要はひとつもなかったと四郎は思った。

校庭に、生徒と遊ぶ若い男性の声が響いた。四郎はハッと声のほうを見た。石村耕作先生が受け持ちの生徒たちと鬼ごっこをしている。先生が鬼だ。生徒たちはうれしそうに先生の周りを取り囲み、うろうろ歩いて逃げ出そうともしない。石村

先生はぐるりと体を回してここに生徒たちの顔を見ている。ときどき手をひゅつと伸ばして近くの生徒に触ろうとするが、本気で捕まえようとはしない。そのたび生徒たちはきやあきやあど欢声をあげて逃げ回った。

急にむらむらとした怒りが四郎の腹にわきあがった。

(なんで笑っていられるんだ。五郎がいないのに)

石村先生は五郎の訃報を受け、去年石村先生は四郎の家にやってきて五郎の骨箱を抱きしめた。四郎はその時初めて、石村先生が五郎を大切に思ってくれていたことを知った。

五郎が三年生になってしばらくしてからよく先生のことを話すようになったので、学校が楽しくてよかったと四郎は思っていた。しかし今まで兄が亡くなり、母が亡くなった四郎の悲しみに寄り添い励ましてくれる大人は誰もいなかった。石村先生が個人的に五郎に関わりを持つとうとしてくれたことは四郎は想像しなかった。五郎が石村先生の明るさに当てられ、一方的に慕っているだけかと考えていたのだ。そうではなく、五郎が先生と呼び、先生も五郎と名を呼んで語りかける、あたたかく親密な間柄があったのだと四郎は心打たれたのだ。

それなのにどうだろう。もう石村先生は五郎のことを忘れているのではないか。

あの日五郎はおそらく日進の沢のほうへ歩いていったのだ。石村先生に会いに行こうとしたに違いないのだ。誰もそう言わないが、四郎はそうだと思っている。五郎は石村先生に会いたくて出かけ、泥流に遭ったのだ。

(そんなことも知らずに、あいつは)

あいつと心の中で呟いた自分に四郎は驚いた。五郎が、今日先生がな、と話すときのうれしそうな笑顔が浮かんだ。石村先生のことを憎く、腹立たしく、どうしようもない気持ちで胸がいっぱいになり、窓の外を睨みながら四郎は涙を一粒落とした。

四郎は次の日朝早く学校に行き、石村先生はまだ教室に来る前に黒板いっぱいチョークでぐちゃぐちゃ落書きをした。力を込めて書き、チョークを何本も折った。数日それを続けた後は、きれいに並んだ机をめちやくちやに動かして生徒がすぐに席につけないようにした。汚れた掃除道具を教室のあちこちに置いたり、貼ってあった習字を全部剥がして床に落したりした。ただ、それらを踏みつけたり破ったりすることまではできなかった。四郎のできることはそのくらいが限度だった。

「石村先生困ってるってなあ」

「うん、誰がやってるのかわからんのだろう？」

同級生がひそひそ話す声が聞こえてきて四郎は体を固くした。嫌がらせ行為をしている最中はぎらぎらと内側にやる気が満ちているが、終わったとたんに人目が気になる。いつ自分がやられたとばれるかそわそわしはじめる。石村先生が困っていると聞いた今も、さまを見ろという気持ちとどうしようという気持ち両方わいてくるのだ。

(こんなことをしていても、別に五郎は喜ばないだろうなあ)

自分の腹いせに過ぎないという自覚があった。しかし四郎はたまらなかつた。朝目が覚めると、あの日の変わり果てた五郎の姿が瞼の裏によみがえる。そして石村先生への怒りとともに起き上

がるのだった。

習字を床に落とした日の放課後、四郎は職員室の前でぼったり石村先生に会った。瞬間、四郎は責められると思いきその場に立ちすくんだ。

「四郎じゃないか、久しぶりだなあ」

石村先生は目尻にしわがでけるほどにっこりして、懐かしむように言った。同じ校内にいてもなかなか会うことはないのだ。四郎が何も言えずにいると、石村先生は四郎の肩をゆっくり叩き、「背が伸びたなあ」

と掠れ声で言った。四郎と会えて心からうれしそうに様子を見て、何もわかっていないのだと四郎は思った。この人は四郎が自分を困らせるようなことばかりしている張本人だと少しも思っていない。四郎はくるっと後ろを向いて駆け出した。

虚しきで泣きたい気持ちだった。もし石村先生が四郎を見て表情をこぼらせていたら、責められる怖さもあつたらうが、すつきりもしただろう。だが何も気づかれていないことで、五郎がますます憐れな存在になったような気がしたのだ。

翌朝四郎は布団から出られなかつた。学校を休んでしまえば、何日も続けていた嫌がらせが止まり、四郎のしわざだとみんなにわかつてしまう。そう思っても起き上がることができなかつた。学校に行けば昨日のように石村先生にぼったり会ってしまうかもしれない。今は石村先生の顔ほど見たくないものはなかつた。

父は四郎に、具合が良くなつたら学校へ行けよと言いつ残して仕事へ出て行つた。父は四郎に対して口数は多くないが、心配してくれているのはわかる。妻と、五人の息子のうち四人失つた父のことも、時々ふと憐れに思えてならない。愛情表

現が上手くなく、母が亡くなったあと、自分や五郎へどう接していいかわからない部分があるようだった。五郎はいつも父や四郎に怒られないかとびくびくして過ごしていた。

(そんな五郎が明るくなったんだ。石村先生が担任になってから)

びくびくしながら四郎にずっとくっついていた五郎は、三年生になってしばらくしてから笑顔が増え、落ち着きを見せるようになった。それだけでなく、友達と遊ぶために出かけるようになり、先生の家にも一度遊びに行つた。一里も歩いて日進の沢まで行き、喜んで帰ってきた。そしてニコニコしながらその様子を話してくれた。五郎の言語化能力では、おそらく五郎の感情の半分も四郎に伝わっていなかっただろう。四郎が想像するよりずっとずっと五郎は楽しかったに違いない。

四郎の胸の中にはどうにもできない気持ちがある。五郎を明るくしてやれたのは自分ではない。石村先生だ。そう思うとなおのこと、あの日石村先生の家を訪ねていった五郎がかわいそうで仕方なかつた。大好きだった先生に会えずに死んでしまい、その先生は今笑って生徒たちと過ごしている。そして四郎の仕返しも、石村先生にはそれほど堪えているようには見えなかつた。そうすると四郎の弟はどうすれば浮かばれるのだ。

四郎は寝返りをうってじつと破れた障子を見つめた。

(……先生の家まで行くか)

一人で遠い道のりを歩く五郎の姿を思い浮かべ、四郎は考えた。

五郎が辿り着きたかつた場所へ代わりに行く。それがいい。なんだか胸にとてもしっくり来るよ

うで、四郎はふつと息をついた。五郎と一緒に行くつもりで行こう。

(先生の家に着いてから何をするかは……)
何も思いつかない。だがそれはあとから考えればよい。

四郎は思いきって布団をはねのけた。

(先生の家は今は日進でなく三重団体だ。吉田村長の隣だ)

家を出た四郎は心の中で確認すると、意を決して一歩踏み出した。市街から遠くへ歩いた経験は四郎にはあまりない。先生の家の場所は定かではないが、迷いそうなら誰かに聞けばいいだろう。以前と場所が変わった先生の家に辿り着いて、それで何になるのだろうかと考えかけて四郎は頭を振った。今はそれを考えなくともよい、行くことに意味があるのだと自分を納得させ、よく晴れた空の下を歩き続けた。

(年中こんな気候ならいいのにな)

そんな夢のようなことを思う。雪が溶け、花が咲き乱れるかがやくような季節は、すぐ過ぎ去ってしまう。そんな季節に人の大事な家族を奪わなくなつていいんじゃないかと、四郎は十勝連峰の方角を睨みつける。遠くにそびえる山々は何も言わず、昨日と変わらず美しい。四郎の頬を涙が伝った。

大雨が降り、山も花も見えないなか、ひたすら先生の家へと向かった五郎の道のりを思い、黙々と四郎は歩いた。

「着いた」

四郎は小さく呟いた。家を出て一時間も歩いた頃だった。道から見下ろせるあの家だ。途中で

人に尋ねたので間違いない。

「大きい家だな……」

四郎は辿り着いた達成感で体が満ちていた。

(五郎、着いたべ。五郎が来たかった先生んちだ)

四郎は胸の中に語りかける。

(今は先生いないけど……な、よかつたな。遠かつたけど、ちゃんと着いたぞ)

四郎は朝早くに石村先生の教室に嫌がらせをしていた時とは違う、すがすがしい気持ちを感じていた。正確には五郎が来たかったのは日進の沢の、石村先生が在宅中の先生の家なのだが、四郎はこの場所に来られて満足していた。ここだって石村先生が住んでいる家に違いない。それはすなわち五郎が来たかった場所だ。

四郎は最初から失念していたことがひとつあった。先生の家には先生の他に住人がいるかもしれないということ、四郎はなぜか考えもしなかったのだ。

「こんにちは」

後ろから声がかかって四郎は飛び上がった。家の周りをぐるりと回っていた時だった。中に入ろうとまで思っていないが、近くで見ることが、五郎にも同じものを見せてやっていると気持でいた。気づくとすぐうしろに四郎と同じくらいの背丈の女の人が立っていた。

「よくいらっしやいましたね。何かご用事でしょうか？」

少し寂しそうな顔をした四十くらいの女の人は、やさしい声で四郎に語りかけた。四郎はすっ飛んで逃げ出したかったが、あまりのことに体が固まって動けなかった。

「(一)めんなさい」

やつこのことで声が出た。何も悪いことをしていないのにどうして謝る必要があるんだとすぐに後悔した。だが他に何の言葉も出てこなかった。それに石村先生に対しては、四郎は謝るべきことをたしかにしている。

女の人は少し顔を傾けたが、寂しげににっこりと笑って言った。

「どちらからおいでに？」

四郎が答えられずにいると、女の人の後ろから背の高くて体つきのがっしりした男の人がひよいと顔を出した。四郎の心臓は跳ねあがった。

(石村先生!?)

一瞬混乱するほど顔が似ていた。しかしよく見ると目もとが少しだけ、この男の人のほうがやさしかった。四郎は思わずホッと胸をおさえた。石村先生は今学校なので、ここにいるはずはないのだ。

すると男の人のほうも四郎の顔を見てハッと、

「五郎君……」

と呟いた。

「いや、すごく似てるけど……五郎君のお兄さんかな？ こんにちは、よく来てくれたね」

男の人はにっこり笑って手を差し出した。

四郎はその手を握ることも何か言い返すこともできずに突っ立っていた。

佐枝と拓一は、出されたお茶に手をつけず一点を見つめて座っているだけの少年を前に、何をどう言おうかと考えていた。

「……耕作がいつか、五郎君のお兄さんのことを話していたことがあるんだ。きみは……四郎君だね？」

拓一がつとめてやさしく尋ねると、少年は床を

見つめたままぎこちなく頷いた。拓一も頷く。

「母さん、五郎君というのは耕作の受け持ちの生徒だった子なんだ。うちに遊びに来てくれたこともあるんだよ。かわいそうに去年あの爆発で亡くなってしまっ……」

拓一は佐枝に言った。佐枝は五郎が遊びに来たときにはまだ函館にいたのだ。

「まあ……」

佐枝は悲痛な声で呟いた。四郎のほうを向いて床に両手をつくると、佐枝は深く頭を下げた。

「……本当に、残念なことでした」

泣いているような声だったので、四郎は思わず佐枝を見た。

顔を上げた佐枝は鼻が赤く、目頭も赤かった。

四郎は動揺して目の前の湯飲み茶碗をとった。

この人は五郎に会ったことがない。明らかに今、五郎という存在を聞いて知ったばかりだ。それなのに、どうして。

四郎がお茶を飲むのを見て、拓一は少しほっとした。

「四郎君、おれは拓一と言って、耕作の兄だ。よろしくね」

「……はあ」

拓一はにっこり笑って四郎の肩をぽんぽんと叩いた。

「ゆっくりしていくといいよ。耕作は夕方にならんきや帰らんけど、もしよかったらそれまでいてくれよ。おれはこれからまた田んぼだが、帰りは馬で送っていくからね」

「いや、そこまで世話になるつもりは……」

四郎がもそもそと何か言おうとしたが、拓一はざつと立ち上がって出て行ってしまった。

拓一も佐枝も、四郎がまだ高等科の生徒であ

るとも、学校を休んで来ているとも思っていないのだろうか。昼間から突然家にやって来た見知らぬ人間のことを、こんなたやすく受け入れられるものなのだろうか。

佐枝が立ち上がり、

「お昼はすみましたか」

と台所へ歩いていく。

「よかったら、余り物ですけど、召し上がってください」

佐枝の差し出した、器に丁寧に盛られた煮しめがあまりにうまそうなので、四郎は生睡をのんだ。もう昼を過ぎていた。

だが自分がここへ来ようと思ったのは、石村先生の家族とおしゃべりしたり食事をしたりするためではないと四郎は思い直した。

「おれは……ここへ来られたから、もういいんです。もう、帰らないと」

目的は達成している。きつと五郎も少しは満足しただろうと四郎は考える。

だが本音を言うと四郎はもう少し休んでいきたくった。足が思ったよりも疲れている。

四郎がぐずぐずしていると、佐枝はその様子を見てとり、

「耕作が、帰ってくるまでいてくださいませんか？五郎さんのお兄さんがうちに来てくださったのに帰してしまっ……は、私が耕作に怒られます」と嘆願した。石村先生が帰ってくるまでいたところで、四郎にとってはうれしくもない。うれしくないどころか、四郎は先生に会いたくないのだ。

しかしわざわざ石村先生の家までやって来た四郎に、先生の家族がそう勧めるのは当然のことだと四郎は思った。

（石村先生の家に先生の家族がいるなんて、考

えもしなかったなあ）

悔やんでも今となってはどうしようもなかった。思いもよらないことは起こるものだ。

結局四郎は佐枝の煮しめを食べ、田んぼで働く拓一を遠くに見ながら佐枝に髪を切ってもらっている。手持ちぶさたにしていたら髪を切らないかと提案されたのだ。

（父ちゃんはこんなにまてじゃない）

自分で切るのには難しいので、家では父に髪を切ってもらっている。父は切るのが得意ではない。鋏を持ったままぐるぐる首を動かして四郎の頭を前から後ろから眺め、どう切ったものか迷う。迷うものの切るときは勢いよく切り、あちこち長さがばらばらになる。四郎はめつたに父に散髪を頼まず、髪はいつも伸び放題だった。

いま四郎の頭皮から伝わる佐枝の手つきはとてもやさしい。緊張で固まっていた全身の筋肉がじんわりとほぐれていくのを四郎は感じていた。懐かしい心地だった。

「帰ったら父ちゃんがびっくりする」

思わず四郎が言うと、佐枝の髪を切る手が止まった。

「お母さまは……」

呟くような小さな声だったが四郎にははつきり聞こえた。しかし四郎は嫌な気持ちにはしなかった。佐枝から不躰きは少しも感じられなかった。

「母ちゃんは、死にました。おれが七つの時に」

「……………」

「兄ちゃんたちも死にました」

「……………」

佐枝はそつと四郎の頭を手で梳くと、再び鋏を動かした。

鋏が髪を切る静かな音だけが聞こえる。

「あなたと同じ年頃の娘がいました。私にも」
四郎の前に置かれた小さな鏡に佐枝の寂しげな口もとが映った。

「十一年ぶりに、会って髪を結うつもりでした」
四郎はハツとした。

(あの爆発で死んだのか)

四郎は去年の爆発の被害について耳にしたものうち、ほとんどを覚えていなかった。五郎の理不尽な死だけがずっと四郎の内を占めていたものだった。それ以外の、誰々の家は何人流された、誰が亡くなったという情報は耳に入ってきてても四郎の心を動かさず、記憶にもとどまらなかった。今、佐枝の娘が亡くなったことを知り、初めて四郎の心は動いた。

自分と同じ年頃の佐枝の娘だという人はどんな人だったのだろうか。佐枝に似て静かでやさしい人だったのだろうか。村のどこかですれ違ったりしたことあるのだろうか。

とんぼ返りする木や大岩や泥が山から迫ってきたとき、どんなに怖かっただろうか。

四郎の頭の中に、ずっとこびりついている弟の恐怖にゆがんだ痛ましい顔がある。四郎が泥流の惨状を目にしたとき真っ先に想像したものだ。

その五郎の顔に、佐枝に似た少女の顔が重なった。

(怖かったべ……)

五郎だけは死ななくてもよかった、四郎はずっとそう思ってきた。だが本当は五郎だけでなく、佐枝の娘も、他のすべての亡くなった人たちも、死ななくてもよかったのではないか。五郎はたしかにあの日自分の家にいれば死ぬことはなかった。それならば、自分の家において死んだ多くの人たちは死んでも仕方なかったのか。

田んぼで拓一が真っ黒い馬と一緒に働いているのが見える。快晴の下で馬の体が白く光っている。誰かの弟、誰かの妹、誰かの兄、誰かの姉、誰かの娘、息子、母、父があの日突然命を奪われた。そのうちの誰が死んで仕方なかったのか。次の日も人生が続くはずだったのは四郎の弟だけだったのか。

家族を亡くした深い悲しみが胸の底にずっと沈んでいるのは、四郎だけなのか。

「さあ、終わりましたよ。さっぱりしましたね」
佐枝が明るい声で言い、四郎の肩に落ちた髪を払った。

鏡の中の、すっかり小ぎれいになった別人のような自分を四郎はじっと見つめていた。

夕暮れ時、耕作は急ぎ足で帰路についていた。今日はなんとなく気分が向いて、帰りに花井菓子店で金つばを買った。田んぼの仕事で疲れた拓一の喜ぶ顔を思い浮かべて耕作は自然と歩みが早くなる。

今朝は耕作の教室に何も異変がなかった。近頃続いていたはずはおそらく生徒の誰かによるものだろう。耕作は、その生徒に対して申し訳なさや助けてやりたい気持ちで複雑だった。わざわざ人目のつかない時間に学校に来てこんなことをするその生徒の心のうちに、耕作に対するどんな思いがあるのだろうか。どんなにその思いにとらわれて身動きがとれなくなっているのだろうか。教室でじっくりと話をして反応を探ってみたが、受け持ちの子どもたちの中にはいないようだった。佐枝と拓一にも相談していたが、二人ともその生徒が誰かということより、その子の心を心配してくれた。

今朝になって突然いたずらが止んだのはどういうことか、明日になったら再開されるのか、耕作にはわからない。

(気が済んだのならいいが)

どちらにしても学校のどこかにいるその生徒のことを思いながら日々を過ごすことだと耕作は思った。

暗くなりかけた景色の中に我が家が現れた。田んぼで青と拓一が耕耘している。田んぼのそばにぼつんと人影が立っている。耕作は不思議に思っ立ち止まった。

拓一の知り合いが来ているのなら、一緒に田んぼで働くはずだ。しかしその人影はただ田んぼを見つめているだけのようだった。

耕作はふと坂森五郎を思い出した。せつかく遊びにきてくれた日、家族総出で畑仕事をしており一緒に遊んでやれなかった。五郎自身はそう寂しそうででもなかったが、耕作の目には寂しげに映った小さな五郎の姿がその人影と重なって見えた。

「あんちゃん、ただいま」

四郎は石村先生の声のしたほうへ顔を向けた。先生が手を振りながらこちらへ歩いてくる。

四郎は息を吸って、ゆっくり吐いた。緊張はするが、石村先生に会ってから帰ろうと自分で決めていた。

「耕作お帰り」

拓一も手を振る。仲の良い兄弟なのだとわかる。一年前まではここに妹もいたのだ。石村先生を兄ちゃんと呼び、お帰りと手を振っていたに違いない。

石村先生がハツとしたように立ち止まった。
「あれっ、四郎か？」

弾んだような声に、四郎はぎこちなく頷いた。「どうしたんだ今日は？ わざわざ来てくれたのか」

薄暗くなってもはつきり笑顔とわかる顔で先生は走り寄ってきた。

「ちょうどよかった、先生今日金つば買ってきんだ、四郎も一緒にどうぞだ？」

「先生」

四郎は勇気を出して耕作の目をまっすぐ見た。

「先生の胸の中には、まだいる？ まだ……五郎が」

声が少し震えた。先生からどんな反応が返ってきても構わないと思った。帰る前にどうしてもこれだけ聞いておきたかった。

耕作の顔からゆっくり笑みが引いた。耕作は荷物を地面に置くと四郎の両腕に両手を置いた。

「……五郎はな、ずっといるよ」

薄暗がりの中で耕作の瞳はしつかりと四郎を見ていた。

「じっちゃんとはつちちゃんと、姉ちゃんと良子と一緒に先生の心にいる。一日も欠かさず」

（じっちゃんとばつちちゃんと姉ちゃんとよしこ？）

四郎の体に衝撃が走った。

（そんなにたくさん家族を失ったのか！）

四郎には耕作が祖父母と姉と妹を一度に亡くした人のように思えなかった。頻繁に見かけていたわけではないが、四郎の目に映る耕作はいつも笑っていた。作り笑いではなく心から笑っているように見えた。

耕作は両手を下ろして四郎の手を握り、その手をじつと見つめた。そして思いきったように言った。

「四郎、五郎はな。五郎は……あの日先生のうちに遊びに来ようとしてたんだよ」

思いがけない言葉に四郎の心臓はひっくり返った。それを知っているのは自分ただひとりだと思っていた。

「せ、先生も知っていたのか」

震え声で四郎が言うと、耕作はハツとしたように顔を上げた。

「五郎はやつぱり、四郎にそう言って出かけたのか？ あの日」

「いや、言っていないけど……おれはそうだろうと、思ってた」

「そうか……先生もはつきりと五郎から聞いたわけでないんだ」

耕作は目をぎゅつと閉じ、静かに息をつくことまいた開いた。

「五郎はな、雨降りの日だったら畑仕事はないから、うちで一緒に遊べるというようなことを言っていたんだよ。あの日は雨だったべ。きつと五郎はあの時、うちを訪ねている途中だったんだろうと……」

耕作はどこか痛むような顔でじつと四郎の手を見つめていた。四郎は何も言えず、耕作もしばらく黙っていたが、やがて耕作は四郎の両肩に両手を置くと四郎を抱き寄せ、抱きしめた。

「四郎……すまんかった。五郎にも、心の中で何度言ったかわからんども、本当に……すまんかった」

体の奥底からしぼりだすような声だった。

四郎の目に、五郎の恐怖にゆがんだ顔、変わり果てた姿、あんちゃんと呼ぶ笑顔、今日先生がなと楽しそうに話す顔が駆け巡っていた。

（五郎……先生は知ってたよ、お前が先生んち

に行こうとしたことわかってた……ちゃんとわかってたよ）

耕作の心の中に、あの日耕作のもとへ行こうとした五郎がいる。今まで自分だけが知っていると知っていてやれると思っていた五郎が耕作の中にいるのだ。

「先生」

四郎はやつぱりのことでも声を出した。耕作はそつと四郎の体を離すと涙のこぼれそうな目で四郎を見た。この人は家族を四人も失って、本当なら五郎のことを考えている余裕はないはずなのに四郎は思った。四郎自身、泥流災害で百四十四名も亡くなったにもかかわらず、ずっと五郎のことしか考えられなかったのだから。それなのに耕作は五郎を一日も忘れていないと言う。一日も欠かさず耕作の胸には、あの日耕作を訪れようとした五郎がいると言う。

「あ……ありがとう」

震え声で言うのと同時に四郎の喉と目の奥に熱い塊が押し寄せてきて、四郎はその場にしゃがみこんで泣きじゃくった。

五郎の死は不幸だった。だが五郎が憐れな存在であるはずがないと四郎はようやくわかった。

五郎の思いは消えずに残っている。そして生きている時も、亡くなった今も五郎は四郎や耕作の胸の中にいて、変わらず大事に思われている。のこされた自分はいずれ泣くばかりではなくなるだろう。それでも五郎は四郎の胸にいつづける。

耕作の妹もずっと耕作や拓一や佐枝の中にいるのだ。のこされた人が泣く時も、笑う時も、どんな時も失った悲しみはいつも胸の底にあり、亡くした大切な人を思う気持ちに心が灯っている。

生徒を教える耕作に、田んぼを耕す拓一に、髪

結をする佐枝に、日々を生きる人々の中にそれがある。

(おれも、日々を生きよう)

五郎と一緒に。

そう心で呟くと、四郎の胸の中の五郎が声を立てて笑った。夢で笑っていた五郎が自分のところに来てくれた気がして、四郎はさらに泣いた。

青に餌をやった拓一と、夕食の準備を終えた佐枝が近くにやってきて、四郎が泣きやむまで四郎の背中をさすってくれた。日はすっかり落ちていた。

「ごうもすんません」

四郎の父が拓一に何度も頭を下げた。拓一は「なんも」と笑うと四郎に手を振り、青に乗って家へ帰って行った。

あんなに一生懸命働いていた馬をまた何キロも歩かせるなんて、四郎は拓一の送るといふ申し出を断ったのだが、拓一は「青は大丈夫」と言っただけで馬に乗せてくれた。道中、拓一のアマリの話しやすさに、四郎は自然と自分が石村先生の教室にいたずらしたことを話していた。

「先生には、明日謝ろうと思います」

「そうか。偉いな。でも耕作は怒っちゃいなかったよ。誰かわからないその生徒のことを心配してた。君が五郎君のことを思う気持ちは、おれにもよくわかるよ」

やさしい口調で言われて四郎はまた涙が出そうだった。

父は夕食を作って待っていてくれた。学校を一日休んだことと、石村先生の家に行ったことを告げると、父は「そうか」と言ったきりなんと「言っていないのかわからないようだった」。

「石村先生に金つばももらったよ。父ちゃんの方もあるよ」

父はホツとしたように頷いた。四郎の様子が朝よりも元氣なので安心したのだ。

「頭、よかったな」

父が自分の頭を指さしながら言った。髪がさっぱりしてよく似合っているとほめた。四郎は黙って頷いた。言いたいことがたくさんあるはずなのに、胸がいつぱいで、四郎は何も言えなかった。

明日から、少しずついろんなことを父と話せたらいいと思う。石村先生のこと、佐枝と拓一のこと、それから五郎のこと。母のこと。兄たちのこと。そして、日々のこと。

(五郎)

胸の中で呼びかけるとすぐさま、なかに兄ちゃん、と声が返ってくる。

四郎はにっこり笑った。それを見た父の眼角も上がった。

明日石村先生に謝ったら、また先生の家に遊びに行つていいか聞こうと四郎は心に決めた。

「泥流地帯」は時代を超えて

(三浦綾子さんからのメッセージ)

松野 富子



——「泥流地帯」読んで作文を——

二〇二〇年の五月、今から三年前。新聞に掲載されていた作文の募集記事を私は興味深く読んだ。それは、上富良野町と町民有志でつくる『泥流地帯』映画化を進める会が主催の第一回『泥流地帯』作文コンクールの作品を募集する囲み記事だった。何と意外なことに内容は自由、さらに字数制限なし。

面白いコンクールだなあ……と注目した。

作家の故三浦綾子さんの小説『泥流地帯』「続泥流地帯」をテーマに作品を募集する、という。主催の会では、泥流地帯の映画化を目指していたが三年前の当時は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で延期になって、その代わりに自宅で過ごす人たちに小説を読んでもらおうとコンクールを企画したとのこと。

このころは「コロナ禍」と言われた時期で、ウイルスに感染すると重症化して大勢の人が亡くなる。医療機関は逼迫し社会全体が一時、騒然として緊急の事態だった。

もしかしたら自分も感染すれば死ぬかもしれない、と思い日常生活でも常に『コロナウイルス』の不安と恐怖におびえていた。

実際、三年前にはイベント行事が次々と中止、もしくは延期になる中で日常の細やかな楽しみも「自粛」する雰囲気であったし、この令和の時代であっても信じられないような出来事が起きる、と考えさせられた。

まさにこうした状況で上富良野町が企画をし

てくれた三浦綾子さんの「泥流地帯」を読んで作文を、というコンクールはユニークで大変インパクトがあった。

私にとっては思いがけなく小説「泥流地帯」と出会う機会となり、上富良野町の企画に感謝している。

実は昔、学生時代から三浦綾子さんの作品が好きで当時、自分が読んだ著書は「塩狩峠」や自伝「石ころのうた」など、だった。私が感動したのは作品の舞台が何と言っても北海道であること、そして何より作家の三浦綾子さんの人柄とひたむきな生き方に心が惹かれた。

○三浦綾子さんの足跡を辿ると

(三浦綾子さんは、大正十一年 旭川出身。高等女学校卒業後、歌志内や旭川で教職に就き終戦後に離職。間もなく肺結核を患い、その後も脊椎力エス、パーキンソン病など何度も病魔に襲われる。昭和三十四年、旭川営林区署に勤務していた三浦光世さんと結婚後に口述筆記による二人三脚の創作を確立)三十八年に朝日新聞社の一千万円懸賞小説に『氷点』を応募し入選、大ベストセラーとなる。平成十一年に七十七歳で亡くなるまで『泥流地帯』『塩狩峠』などキリスト教の信仰に基づいた数多くの作品を生涯書き続けた)

この度、予期しなかったコロナ禍の出来事を自分が経験したことで、時代を超えて再び三浦綾子さんの著書『泥流地帯』と巡り合わせたことに深い意味があると気づかされた。

「令和」の時代に自分は現在、生きているが毎年、国内で台風や地震、豪雨さらに火山噴火などの自然災害が発生している。

突然の苦難に直面した場合、どう向き合うべ

きなのか、そう考えながら作品の「泥流地帯」を読んでみたいと思つた。

小説「泥流地帯」「続泥流地帯」は開拓期(大正時代)の北海道の上富良野村が舞台。

三浦綾子さんが作品の題材に考えたのは、一九二六年五月(大正十五年)十勝岳大噴火による「山津波(泥流)」である。この噴火災害で、死者行方不明者一四四名が犠牲になった、という。この史実をもとに小説を書くように勧めたのは、営林署勤務の経歴を持つ夫の光世さん知って運命的なものを感じた。

前編の「泥流地帯」では、その災害に見舞われるまでの石村家の人々を作品の中心に、『真面目に生きている人たちが何故、過酷な試練を受けなければいけないか』という主題を投げかけてくる。

上富良野村で開拓農家に生まれた石村拓一と耕作の兄弟は、幼い頃に父を亡くし母とも離れて(髪結いの仕事で函館に)博識で温厚な祖父の市三郎等(祖母・キワ、姉・富、妹・良子)の六人で貧しいながらも慎しく暮らしていた。

それでも小作農家の生活は努力しても楽にならない耕作は悩んでいたが、教師になる夢を持ち兄の拓一は想いを寄せていた幼なじみの福子が父親(曾山巻造)によって深城鎌冶の営む「深雪楼」に身売りされ絶望するが、お金を貯めて必ず福子を取り戻す決意をする。

拓一と耕作兄弟は、様々な問題に直面しながらも祖父の市三郎をはじめ家族や恩師、友人ら上富良野の人々との関りをつうじて多くのことを学びつつ、青年へと成長していく姿に自分がつの間に親の心情で見守った。

そして大正十五年、五月二十四日。長く待ち

続けた母が函館から、ようやく帰ると連絡が入ったが。大音響を山にこだましながら、

「ドーン」十勝岳大噴火による泥流被害が発生する。泥流が、釜の中の湯のように沸り、躍り狂い、山裾の木を根こそぎ抉る。バリバリと音を立てて、木々が次々に濁流の中に落ちこんでいく。樹皮も枝も剥がし取られた何百何千の木が、とんぼ返りを打って上から流されてくる。一瞬のうちに部落全体を、呑み込んで市三郎(祖父)、キワ(祖母)、富(姉)、良子(妹)の四人が石村家で犠牲になり亡くなった。この泥流の場面は著者の三浦綾子さんの文章を引用させていただいたが泥流の恐怖が迫ってくるようだ。

まさしく本編のクライマックスの場面では、人々の苦難が描かれており、奇跡的に生き残った拓一と耕作が災害の残酷さに思わず呟く。「まじめに生きていても、馬鹿臭いもんだな」と耕作は呟くが、拓一は、

「もう一度生まれ変わったとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ」と応える。

本作品の「続泥流地帯」では著者の三浦綾子さんが追及したテーマの『苦難を生きる者たちが愛し合い、支え合いながら成長していく姿を大災害に生き残った人々が求めた苦難の意味を重ねて私たちに気づかせてくれる。

その後、十勝岳噴火による泥流は上富良野村の日進部落を襲い、住民の家も全てを押し流した上に田畑を埋め尽したのは流木と泥土。さらに岩石が積み重なり、土は硫黄と化して再生不可能と思われる打撃を与えた。

亡き祖父の市三郎が三十年も苦勞した開拓も水の泡となってしまうた…。

それでも祖父母の志しを信じ、日雇人夫に出ながら農地を復興しようとする兄の拓一と中学入試に一番の成績で合格しながらも姉の富の結婚を願って年間百円もかかる学費を考え進学を断念し、代理教員として働き始める。耕作の働きぶりは生徒からも教員からも人望を集めて、耕作は生徒に教えながら正式な教員資格を取るため教員資格試験の準備をする。

拓一と耕作の下には、手に職をつけ(髪結い)ようやく石村家に帰り付いた母の佐枝も加わり三人家族となったが、相変わらず連日、農地を復興するために泥田に沈んだ数えきれない流木を辛抱強く拓一は、取り除くため働いていた。僅かな希望は、深城のもとに身を売られた幼なじみの福子が耕作によって泥流被害の時に助け出され、彼女を愛する拓一は深雪楼から救い出そうする。

一方で、拓一と同じように上富良野村の復興を願う吉田村長がその資金調達のため「上富良野債」を発起しようとする、深城が中心となった村民の反対運動が起き、大会が開かれたのである。作品中の細かい部分は、フィクションであるが、私が注目したのは物語に登場した吉田貞次郎村長は、実在の人であり、著者の三浦綾子さんが夫の光世さんと二人三脚で丹念に取材をして吉田貞次郎村長の功績と貴重な言葉(志)は、作品に忠実に描かれて感慨無量であった。上富良野町史を参考文献で読み始めて分かったことである。

○吉田貞次郎村長の足跡

吉田貞次郎は明治十八年、二月十七日

三重県一身田村(現津市)に生まれ、十六才で

家族とともに北海道に渡り父が入地後四、五年目に五十六才で、充分な成功を見ることなく、上富良野村西線北七十九番地で死去。

彼は十六才の年、父に従って開拓の第一歩を踏み出した時の畑地農業の体験から、開拓時代の移住者が主食の確保にどの様な苦心をしていたのかを知っていた。北海道で米が穫れたら、というのがその頃の合言葉であったから、米作ということは全ての農民の総意であった、と考えていた。

作品の中で拓一が(村民の大会)演説する場面は吉田村長が当時、語っていた言葉であり、

『自分達は三十年の苦心を今一朝に見捨てる事が出来ません。石にかじりついても、あの土地を復興したいと思う。どうか私達の心を汲んで下さい。』

この吉田村長の言葉に私は感銘を受けた。

本作品の終盤では、拓一が水田の復興に向けて何度も苦難を経験したが、二年後に稲が実った。弟の耕作も念願の教師の検定に合格することが出来た。

稲の刈り入れのころ、幼なじみの節子も看護婦の資格が取れて、福子を説得し深雪楼を脱出させて旭川の沼崎先生(病院)の所へ身を寄せる計画である。朝一番の汽車に乗れたら白いハンカチを、駄目だったら赤い毛糸の襟巻きを振ることに、なった。拓一と耕作が稲刈の田で待ち続けていると、

「ぼーっ」と汽笛が聞こえ、

汽車から白いハンカチが振られた。

拓一も耕作も「あっ」と叫んだ。

私も思わず涙が出た。

本作品の「泥流地帯」と「続泥流地帯」を読みながら

から自然と昔の自分を振り返っていた。八人家族で(両親と私を含め四人きょうだい、祖母)農家だったから生活はギリギリでも賑やかで温もりがあった。だから自分は幸せだったと言える。家族の他にも自分の周囲に居る友人や地域の人々と関わることで今後も自分を成長させる心の糧にしたい。

流る、とまる、まもる、動く

—三重団体泥流体験者子孫の小さな個人的記し
(ペンネーム) 佐々木 戸桃



祖母は、手仕事をしつつふと子ども時分の家族話を口にしたのですが、そこになぜ『北海道』が出て来るのか、わたしにはなかなか分からぬままでした。

廻ります。

わたしは、東京生まれ東京育ちながら自然と『伊勢ことば』を発することがあります。「イントネーションがなんか違うというか…もしかして逆かも？ ずっと東京に住んでるのに不思議だね」と友人や同僚によく言われ、自らもよくわからず、この抑揚や語尾が東京の普通と思いついて入り、恥ずかしい気持ちも度々経てきました。

東京郊外に住む祖父母の家の真横に建ったばかりの小さなアパート。そこでわたしは幼少期を過ごしています。母は、父と結婚そして妊娠してのちも、学生時代の憧れが叶い職に就いて数年経て、もはや生きる幹となっていた教員職を辞める選択はしませんでした。当時は二ヶ月間の産休のみにて育児制度はなく、事情を汲んだ祖父母からの「夫妻で隣に来るなら、生まれて来る赤ん坊(孫)の面倒をみる」ことができる。良かったら越しておいで」という提案により、出産前に祖父母宅隣のアパートに夫とともに入居した、という経緯があります。

母は無事出産・産休を経て職場復帰後、早朝まず隣に住む祖母にわたしを預けて出勤。祖母は粉ミルクを作り飲ませ、陽の落ちてから祖母の元へ寄りわたしを引き取る母。一日の半分…もつとも目の離せぬ赤ちゃんのわたしを育ててくれたのは、三重方言の抜けぬままの祖母でした。わたしのちよこつと、伊勢ことばは、どうやら祖母からの耳倣いのようなのです。

祖母とは、自身が学齢を迎えてのちも放課の午後をも多く共に。

大相撲中継の音を後ろに、祖母は鍋を炊き合間に手編みや手縫いをしながら、わたしは端ぎれや糸を見よう見まねでたどとどしく操りながら、ときにストーブの上で焼ける干し芋の薫りに二人で笑みを分かちながら…そんなある日、突如、祖母は北海道の話をしたのです。

—なんで北海道なんだろう。おばあちゃんは三重の人で、おじいちゃんの転勤で東京に来たはず

子どもながら(それは言っただけのことなのか?)と何かを感じて口を封じ、現実としての大正泥流の一日、を思いがけず知りました。祖母はその後も幾度となく、ふつと思いつくように口にし、内容は同じ、かつ回を重ねるごとに語る情景に色がつき、いつしか、ままだ想像のつく臨場感をわたしは覚えるようになり、更には祖母と

もに泥流体験をしたかの錯覚に陥るまでになったものです。

わたしがそうであるならば、ましてや祖母にとってはそれだけ人生の中でも重すぎるほどの出来事だったと、今改めて深く解せるものがあるのです。

「えらい勢いで流されて…わたしは助かったでしょ、おとうさんらもね。けど、せつちゃんだけ見つかなくてね。みんな『もうあかんわ』て、諦め言うとなら、朝になつてな、ひよっこり帰ってきたんよ。よう生きとった。あのときはみんな、良かったなあ、と大喜びしたわね」

そこだけは、いつも最大限に力のこもった語りでした。

『せつちゃん』は、祖母のすぐ下の妹にあたります。旧姓・吉田。三重団体一員として北海道へ移住した一人です。

せつちゃん、もとい、せつ子を含む五人姉妹は、両親姉妹類とともにかの大正泥流を体験し、おかげさまで生き延びました。

劇中の『節子』。

泥流地帯を読む度によぎるのは、祖母や母から聞き、実際に三度会ったことのあるせつ子です。

せつちゃんからは泥流の話聞いたことこそありませんが、祖母や母曰く、はつきりきつぱり「わたしが姉妹の中で一番美人や！」が口癖だったそうです。「せやねえ、せやせや」と皆半ば(また始

まったで)と和やかに笑い同調すると、せつちゃんは「うん」と一層にこにこになる。

そのせつちゃんは、あの日流され、木にしがみつき止まって明けを待ち、大人になってからは嫁ぎ先にて笑顔で畑仕事に精を出してうんと日焼けし健やかに過ごし、五人姉妹の中の最長寿者に、泥流体験者として、家系でもっとも長期間、『生』をまもってくれました。

※実際、小説に於ける何かしらのモデルとなつたか否かは、著者の三浦綾子先生のみぞ知る、なのかもしれません。

さて、五人姉妹の中でもとくに仲良しだった、祖母・みやちゃんと、その妹・せつちゃん。今、三重にて変わらず仲良く眠っています。

おばあちゃん、せつちゃん、あの泥流が映画になるんよ。

それをな、わたしめっちゃ応援しとんの。

ほんでな、これから本格的に動くでな、どうか素晴らしく出来あがることを見守っていてくださいね。

お願いやに。

あのとき生き、今へ命と縁をつないでくれて、ありがとうございます。

令和五年九月二十二日 三重方祖母・三十三回忌に寄せて。

リアリズムの作家

(ペンネーム) あらいゆう



三浦綾子という作家は、丹念な取材に基づいて小説を書いた。「塩狩峠」「母」などを書く場合も、関係者に取材したり、昔の資料を掘り起こして、徹底的に調べたという。彼女の作品がリアリスティックな輝きを放っているのは、こうした取材が基になっているからだろう。

「泥流地帯」は富良野が舞台の小説である。この小説も他の作品と同じように、丹念な取材に基づいて描かれている。「富良野」と聞くと、どうしてもドラマ「北の国から」を思い出す人が多いだろうが、昭和時代を生きた私などは「泥流地帯」を思い出す。映画にもなったほどだから、発表された当時に話題になったのは間違いない。

その「泥流地帯」は、大正十五年の十勝岳の噴火を下敷きにしている。噴火と聞くと、私などは御嶽山の噴火を思い出す。あのとき映像がテレビで流れたが、大爆発と同時に、噴石と言う大きな石が飛んできて、それを食らって生命を断たれた人もいたと聞いた。山小屋では噴石で穴が開いた。大爆発など経験したこともないので予想もしなかったが、「爆発だ。すぐに逃げろ」では生命を守ることができないのだ、とあのニュースで知ったものだった。

十勝岳の噴火は大正時代であるから、御嶽山の噴火のように噴火の様子が映像で流されたりはしなかったろう。それでも、泥流が流れ、たくさんさんの生命が流れたから、悲劇的な事件だったの

は間違いない。三浦綾子がこの事件に目をつけたのは、取材を基にして人の生き様を描こうとしたからだろう。彼女ほど人間の心をえぐり、真実を見出そうとする作家は他にはいない。

だからだろう。読んでいても、ぐさりぐさりと胸を刺す出来事が次から次へと襲ってくる。貧しい生活の中で懸命になって生きようとする人たちが、本当は悲しみを抱えているが、それを思いに出さず、少しでも前向きに生きようとする人々には本当に感動させられる。

現代のドラマだったら、こうした人々を最後には救い、輝きのある道を最後に示すだろうが、三浦綾子はリアリズムを追求する作家。ドラマのようなフィクションではなく、ノンフィクションに近い形で物語を進めていく。追い詰められた者がさらに追い詰められたり、不幸を味わった者にさらになる不幸が襲ったりする。

特に、十勝岳が大爆発をした後、泥流が流れたとき、家族の中には流されて死亡する人たちも出る。それは現実にも起こったことであるから、三浦氏は手を抜かない。泥流で助からなかった人たちも丁寧に描いていく。だからこそ、私たちはとくに立ち止まり、涙をぬぐいながら読み進めるしかない。

思い出すのは「東日本大震災」。あのとき私たちは救おうにも救えない生命を画面で観た。津波が街を襲ったとき、車も建物も人も犬も全てものが濁流によって流され、沈んでいった。今でも思い出すのは、海に向かって叫ぶ少女の映像。「おかしさん」と叫ぶ彼女は母親は、おそろしく流れられ

た。それでも彼女は叫ばずにはいられなかったのだ。きつと母は帰ってくると思っていたから。

「泥流地帯」にも同じような場面が出てくる。家族が流され、助けようとして飛び込んでいく主人公がいる。しかし、結果的に彼だけは助かり、他の人たちは流されて死亡してしまった。それは現実にも起こったものともリアルな事実であり、それこそ三浦氏が読者に伝えたかった事実なのだ。最後は必ずハッピーエンドで終わるデイズニー映画ではなく、最後の最後まで不幸とかかわり続ける人々を描くのが彼女の小説なのだから。

不幸は運命によって左右はされない。生まれたところとか、地位とか名誉とか、不幸は関係なく襲ってくる。だから、貧しい主人公たちにも不幸が襲ってくるわけである。

私たちは不幸がくると、それと戦おうとする。そして、どうして自分ばかりが不幸なんだと嘆く。私は父を失ったとき、まさにそうだった。

「他の知り合いの父は生きているのに、どうして自分の父だけが他界してしまったのだ」。

その思いを抱いたのは確かだった。自分だけが不幸に敗北したと思いついていたのだ。しかし、実は違うのだ。不幸はだれにでも来るものであり、不幸が到来したら、まずはそれを受け入れ、次を考えることこそ私たちにできることなのだ。泥流に家族を奪われても、周囲から冷たい攻撃を受けても、自分の信念に従って行動しようとする主人公に胸を打たれるのは、不幸を不幸と思わずに、自分の意思に従って行動するすばらしさを目の当たりにするからではないか。

「泥流地帯」は、三浦氏の著作の中でもっとも人気がある作品だと言われる。それは、リアリズムに徹した彼女だからこそなし得た偉業なのだ。

児童生徒の部

泥流地帯のキャスト考えてみた

(ペンネーム) 松島 ボムギョ

拓一 竜星 涼
耕作 神尾 楓珠
福子 福本 莉子
節子 原 菜乃華
富 大友 花恋

「なぜ拓一を竜星涼さんにしたか。」
顔から勇敢そうな雰囲気が出ているから。スーパージョウをやっていて、困っている人、仲間が危機に直面していると自分のことを放り投げ行動してしまう姿が目につく。男らしいかついい姿が竜星涼さんにぴったりだったから。あといい意味でも悪い意味でも後先考えずに行動しているのがぴったりだったから。

「なぜ耕作を神尾楓珠さんにしたか。」

耕作の頼りない感じが神尾楓珠さんにぴったりだなと思ったから。悪口ではないです。神尾楓珠さんは役柄的にぐいぐい行く感じはあまり想像できなかった。拓一と比べて臆病な一面があり、表には出さないけどほんとは怖がっていて情けない感じを神尾楓珠さんにやってほしい。時々良いこととする。恋愛的に最初は一番手男子だったけど最終的には二番手男子になってそう。顔はとって

もイケメンです。

「なぜ福子を福本莉子さんにしたか。」

純粋に恋してそうだから。あとすごい人に優しそうだから。福ちゃんは最初は耕作が好きだったけど、耕作以外にもちゃんと優しくしていたし、どんな人にも心優しい感じが福本莉子さんにぴったりです。あとヒロインっぽい福子のあざとい感じが福本莉子さんです。顔がかわいい。途中で仲間と離れなければならぬ状況になってしまっただけで純粋な心を失われつつあるけれど、最終的には拓一を好きになって見る目あるなって感じ。福本莉子さんにぴったり！

「なぜ節子を原菜乃華さんにしたか。」

お金持ち感があふれ出ているから。上品で一途に恋しているから。草食系かと思いきや肉食系女子というギャップを見せてほしいです。深城(父)のせいである人から悪口を言われ結構深く傷ついている感じが原菜乃華さんにぴったり！深城許せない。

「なぜ富を大友花恋さんにしたのか。」

溢れ出るお姉ちゃん感が凄くから。弟思いなのが溢れ出ている大友花恋ちゃんにぴったり！富ちゃんの優しい感じと一生懸命働く感じが花恋さんっぽい。富ちゃんともいい人なのに死んでしまうのが本当に残念。来世では報われてほしいと思っただ。

運命の歯車

(ペンネーム) 幸輝

私はいつも一人だった。みんな「深城」というその名だけで、私から距離を置くの。だから、私は友達という友達がいなかったの。でもね、きつとあの時から私の運命は変わったんだわ。

あれは私が小学生の時の少し寒い秋の時季だったわね。大嫌いな父と一緒に山へ出かけた日、その山で喧嘩をしているような声が聞こえたの。騒ぎを聞き父と一緒に駆けつけたら、今の旦那さんとそのお兄さんと友達と他の子たちがけんかをしてたの。その内容がね、今思えばとてもくだらないことだったの。その内容はね、山葡萄を勝手にとったことだったの。そこから喧嘩がどんどん盛り上がって彼のお友達が、

「ここは、おれんちの山だぞ！」って言った。そしたらね私の父親が

「ふん、曾山の餓鬼か。ここが曾山の山だってことは、一百も承知だ。お前のおやじのあの飲んだくれがな、この山に葡萄がどつきりあつたらと、わざわざわしに教えてくれたんだ。」って言ったときに、私とても恥ずかしかったわ。だって、すごく大人げないし、子ども相手にそんなことを言うって恥ずかしいのかなって思ったからよ。でもね、彼のお兄さんが父に負けじと言い返してたの。そして、父が彼の母親の悪口を言ったのよ。だからね、それを聞いていた彼が石を父に投げつけようとして、でも父が避けたから結局私のおでこにその石が当たったの。痛かったわ。

でもね、父が

「娘に傷跡が残ったらどうする！」って怒鳴った時

彼が

「そうだったら俺がもらってやるー」
 って父に啖呵を切ったの。すごいわよね私の旦那さん。あとね、こんな素敵なことを言われたのも初めてだったわ。きつとそこから私の運命は変わったのよ。

私は、あの出来事が無かったら今頃見合いで旭川のお医者さんと結婚してたのよ。想像もつかないわね。

「節子さん。ちよいといいかい？」

あら、あの人に呼ばれたわ。

「今行くわ。」

映像化について

(ペンネーム) T T



これは、泥流地帯という作品をすべて読み切った一読者としての意見です。

今、この作品を映画化して町おこしをしようという計画が上富良野にあると思います。

この作品をすべて読み切った私としても、その試み自体は共感できる部分があるので賛成の意を示したいところではありません。

ですが、正直な結論を申し上げると映画化はまず不可能だと思います。ではなぜ不可能なのかその理由を大きく3つに分けて説明したいと思います。

まず一つ目は、タイトルについて全然ふれていないことです。

この作品、名前に泥流地帯とあるのに作中でそのうなっているのが終盤だけというところでもなく短い描写しかなく「下」に関しても、最初は中心になるけど中盤以降はほとんど触れずに人間描写ばかりで、終盤は完全に恋愛小説になってしまい触れるのは本当に最後のほんの少しの「ユマ」だけしかなく全体で見たら半分も触れていないため結局何を伝えたいのかが脱線してしまっているように読んでいて思いました。そのため、映像化して見てもらったとき見ている人により伝わらないのではないだろうかと思えます。

次に2つ目は、上下巻であるということ。
 この作品は、上下巻でそれぞれ540ページと少しくらいある作品でそれ自体は普通の小説と何ら変わりはありませんし、一応そのまま映画化もできないことはないです。

ですが、先に説明した通りこの作品はタイトルについてほぼ触れていないため、泥流を通して伝えたいことが伝わりづらいと思えますし、正直一

冊で完結していても難しいのに2冊で一つの作品のため尚更ややくしくなってしまう。

そのため、もしも映像化する場合タイトルそのものを変えて、下巻全部と上巻少しくらいの内容にする必要があると思います。それであれば、今あげた二つの問題は十分解決できますし台本も作りやすくなると考えています。

ですが、次にあげる問題がとんでもなく厄介な問題になってしまい映像化の妨げになってしまいます。

3つ目は、CGだと再現しきることができないことです。

この作品のテーマは、タイトル通り泥流だと思わんですがこれをCGで再現しようとする途中途半端になってしまったり、迫力がなくなってしまうと思います。さらに言うなら、災害後の住居などは災害そのものを再現するよりもっと難しいのではないかと考えています。

そのため、いざやるとなった場合実写ではなくアニメの方が泥流の怖さとかは表現しやすいし伝わりやすいと思います。ただ、その場合映画だと短すぎてしまうかもしれないので週一回でやる30分ものものがちょうどいいのかなと考えています。最後に総評です。

最初にも述べた通り、わたしはこの作品の映像化自体は賛成です。災害は忘れた時にやって来るといわれていますから、記録を後世に根強く伝えていくためにもするべきだと思います。しかし、今ここで述べた問題はあくまでも一人の主観でしかありませんし、これをすべて何とかしようとなると多分今考えている費用よりも高くなってしまうでしょうから、実写映画化になってしまってもいいと思います。あくまでも、こういうやり方もあるよねという提案でしかないので参考にしていただければと思います。

富報られないので転生させた

(ペンネーム) 羽羅良

武井さんと結婚して、幸せな日々が訪れると思っていた。でも、現実には酷いもので、姑に毎日いびられて私の心はズタズタだった。

挙句の果てには十勝岳が噴火して、私は死んだ。はずだった。

「四月、二十四日。」

私は、十勝岳が噴火する一ヶ月前に戻っていた。十勝岳が噴火したのは私の思い違いだったのか。それとも。

「いいえ、思い違いのほずないわ。私は確かにあの時死んだのよ。」

思い出すのは最後に見た走馬燈。私の人生の半分以上、姑にされたありとあらゆるいやがらせ。また噴火するまでの一ヶ月、あの地獄を過ごせというのか。いつそもう、首をくくってしまおうか。いや。

「復讐よ、そう、復讐するの。どうせあと一ヶ月で死ぬのなら、それならせめて、無念を晴らしてから死にたいわ。」

あの女に受けた数々の嫁いびり、精神的苦痛。その報復をやり遂げてから死んでやる。そう思い立ち計画を練ることにした。

まず、あの女の夕飯に、ニラと混ぜた水仙を混入させよう。廁には南京錠をかけてすぐに入れなくする。地味だけど腹を下したときに廁に入れないのはとても苦痛に感じるはずだわ。これからこうして時間をかけて、シツカリ復讐してあげる。実に楽しみね。

こうして彼女の姑への復讐劇が始まるのだった。

最低な男達と最高な男

(ペンネーム) じえつじえ

節子の父親の深城は最低な男だった。拓一と耕作の母親の悪口を言っていた。それに腹が立った耕作は深城に石を投げたが、深城は避けて、節子の顔に当たった。本当に最低な男だと思う。

福子の父親の曾山も最低な男だった。曾山は福子が幼い頃から酒に狂っていた。借金もしていた。そんな福子の父親は、なんと福子を買ったのだった。このように今までは最低な男しかいなかったけれど、いい男もいる。

拓一はいい人だ。キワ、市三郎、良子を助けに行こうと泥流に飛び込んだ。全員を助けることはできなかつたが、拓一のその勇気のある行動に福子は惹かれたんだと思う。

ちなみに、耕作は福子と節子に特別な思いを抱かれてるのも分からないほど、鈍感な男だった。

泥流地帯と人間の魚の部分

(ペンネーム) 拳出なぐる

この小説を見て思ったことは、人物があまりにも真つすぎることだ。やると決めたことは必ずやるし、誰かにどう言われても意見を曲げたり、折れたりしない。あまりにも綺麗すぎる。綺麗すぎるのが悪いわけではないが、きれいなキャラクターが多すぎるのだ。綺麗すぎて人間らしくない。苦悩するところまではいいい。しかし、もつと絶望し、諦めてほしいと思っている。その方がリアリティがあるし、面白いと思う。

なぜそう思うのかというと、人間の本质は闇の部分だと思ふからだ。夢もかなわない。理想は現実にならない。不満は解消せず生きていくしかない。そう言った『曇らせ』の中で人は絶望するしかない、そういった闇の部分こそが最も人間らしい、私はそう考えている。耕作なんかはいい。闇の部分が垣間見える。

しかしほかのキャラクターもそういう部分が出ていけば個人的にはもつと良かった。闇が深ければ深いほど、光が見えた時、より強く光を感じられるように。

三年越しの告白

(ペンネーム) きそり座の女



泥流から3年たったある日、耕作は旭川に買い物に行き、偶然福子に出会った。

耕作は泥流で祖父、祖母、姉、妹を亡くし、その傷ついた心を癒やすために傷心の旅に出ている。

「福ちゃん、久しぶり」耕作は久々にあった福子に少し照れながら言う。福子は笑顔で

「耕ちゃん、久しぶり。今まで何していたの」

「ちょっと自分探しの旅に行ってたんだ、福ちゃんこそ何していたの」

「私は耕ちゃんがいなくなってから拓ちゃんと結婚したの」

耕作は思わず(そうなのか。おめでとう)とすぐには言うことができなかった。

耕作は旅に行ってから自分は福子が好きなんだという自覚が芽生えたからだ。耕作は夢を見るたびに福子が今まで自分にしていてくれた記憶がたくさん浮かんできて泣いていた。

福子は「耕ちゃんは私達のことお祝いしてくれないの」と耕作の顔を見つめながら言った。

「そんなことないけど実は僕……」耕作は黙り込んでしまった。すると福子が

「ごめんさい私、他にも用事があるから。そうだが耕ちゃん今度家においてよ、拓ちゃんも耕ちゃんに会いたがっているから。」耕作は(うん)とうなずいた。

1ヶ月後、耕作は福子と拓一の家を訪ねた。耕作は家の前で恥ずかしがっていたが、トンとドアが開いた。拓一が開けたのだ。耕作は久しぶりに会った拓一を目の前にし笑顔になって「兄ちゃん」と嬉しそうに言った。

「耕作久しぶりだな、旅は終わったのか」

「ただだけど、1ヶ月前に旭川で福ちゃんに会ったんだ。その時に家においてって言われたから会いに来たんだ」

「そうなのか福ちゃんも中にいるよ。中に入りな」

「ありがとう」

拓一は耕作に再会できたことをたいそう喜んでいった。耕作も嬉しそうだった。家の中に入ると福子が「耕ちゃん来てくれたんだ」と嬉しそうに言った。ちよとご飯支度をしていたため「耕作も食べていきな、それと今日は泊まっていきな」と拓一が言った。「うん、じゃあお言葉に甘えて」耕作は照れながら言った。

ご飯を食べ終わって拓一と同じ部屋で寝るとき耕作が「兄ちゃん」

「なんだ」

「僕、……やっぱりなんでもない」

「そうか。」拓一は耕作が何か話してくれるのではと楽しみにしていたが、耕作が話すのをやめてしまったため少し悲しそうな顔をした。

次の日の朝、耕作が起きる前に拓一は朝早くから仕事へ行った。耕作が起きると福子が耕作のためにおにぎりを作っていた。「おはよう福ちゃん」「耕ちゃん！おはよう起きたんだね」「おにぎり作ったから食べな」「うん、ありがとう」耕作はムシヤムシヤと美味しそうにおにぎりを食べた。耕作はご飯を食べ終わると「福ちゃん、福ちゃんに話があるんだ」と言った。

耕作は緊張しながら「僕は福ちゃんが好きなんだ」と福子に向かって言った。福子は耕作に言われたことが一瞬嘘だと思った。けれど耕作は嘘はつかないと知っていた。福子は「本当に私のことが好きなの。でも私は拓一さんと結婚をしているか

ら一緒ににはなれないわ」と戸惑いながら言った。

すると耕作は、「でも、本当に福ちゃんが好きなんだ！だけど兄ちゃんを裏切ることはできない」と言いながら泣いた。

「あのね、本当は私も耕ちゃんのことを好きだったの、耕ちゃんがいなくなつてから私何度も泣いていたの」「だけど今でも耕作ちゃんと一緒にいたいと思ってるの」と福子はじつと耕作の目を見つめながら言った。耕作は「本当かい？福ちゃん」と驚いたようだった。耕作は福子と両思いだということわわかり嬉しかった。だが拓一にこのことを言っても許してくれるだろうかと思んていた。「耕ちゃん、私は耕ちゃんと一緒にになりたいわだから拓ちゃんが帰ってきたら話しましょう」と震えたような声で言った。耕作も(うん)と頷き拓一の帰りを待った。

夕暮れ時、拓一が帰ってきた。耕作と福子に緊張が走った。耕作は「兄ちゃん、話があるんだ」と拓一を居間へ呼んだ「どうしたんだ、福子までいて、そんなにかしこまった話なのか」

「兄ちゃん、あのな俺……福子のが好きなんだ」「拓一は耕作が言ったことに驚いたようだった。「だから、俺、福子と一緒にになりたいんだ！お願い！福子と一緒になることを許してください」「耕作は震えたような声で拓一に言った。すると拓一は、「耕作、福子と一緒にになりたいのはわかった。」「だが、福子は俺と結婚しているんだ。お前とは一緒になることはできない」と耕作に言い聞かせた。

「兄ちゃんが福子のが好きなのはわかってる、だけど一生のお願いだ。頼む。」耕作はなんとしても福子と結婚したいと拓一に言いながら頭を下げた。福子も耕作と一緒に頭を下げていた。すると拓一が、「耕作、福子、お前たちの思いはわ

かった。俺が福子のことを諦める。だが一つ約束してくれ、福子のことを俺と一緒にいた時以上に幸せにすると」と耕作に言った。耕作は「兄ちゃん：ありがとう。」と拓一に泣きながら言った。こうして拓一に福子と一緒にいることを許してもらえた耕作は福子と結婚することができ、幸せに暮らすことができました。

福子

(ペンネーム) ひよこ、ピヨピヨ



幼馴染の耕作と拓一と福子は三角関係だった。最終的に拓一と福子は結婚する未来が見える。節子につれられて福子は旭川行きの汽車に乗った。深城から逃げるためだ。

それでも福子は父の借金を返すために逃げることは悪いことだと思ってしまう。佐野文子さんが旭川にいて、その人が助けてくれるから旭川行きの汽車に乗った。

旭川の駅で福子の兄の国男が待っている。国男も、福子の借金を返すまで、結婚をしないと誓っている。

汽笛が遠くで聞こえた。汽車が上富良野の駅を出た。その汽車に福子は乗ったのか。節子と福子が、二人並んで座っている姿が目に見えただけで、耕作の勘違いだった。

あの時、節子は福子が乗っていなかったから、赤いマフラーを振らなきやいけなかったけど、白いハンケチしかなくてそれを振ったのだった。

続・泥流地帯

(ペンネーム) バズライトイヤーの

ペットのジョンの友達



耕作と拓一は、上富良野の復興後あの時の泥流について調べた。泥流に襲われる直前に良子がカメラを拾ってそれが何かも分からず取っていた写真が物置に残っていた。ちなみにそのカメラは二〇〇〇年に普及し始めたデジタルカメラだった。写真を見てみると、謎の円盤が写っていた。

そこで耕作と拓一はこの未確認飛行物体を調べするために、旅に出ることになった。

初めて液体ロケットを打ち上げたロバート・ゴダード氏なら何かわかるかもしれないと思い、マサチューセッツ州ウースターに行く。

耕作と拓一は海をどうやって渡るかも考えずに、ひたすら歩いた。二日間歩いたころ二人は、現在の置戸町まで歩いた。ここでは、野宿をした。次の日、二人は朝早く起きてまた歩き出した。この日は雨が急に降ってきて、あまり進むことが出来なかった。そして一週間ほど歩き二人は、知床まで来た。

そこで二人は思った。どうやって海を渡るのか。海は耕作&拓一が思っていたより、広がった。途方に暮れている二人の前にでかい円盤のようなものが現れた。そして光と共に耕作と拓一は飛ばされた。辺りを見渡すと、見たことがない光景が広がっていて、知らない言葉がそこらじゅうを飛び交っていた。二人はここがアメリカだと思い、ロバート氏を探しに走ったが、言葉や地形が分からず見つけることが出来なかった。だから拓一は地形を、耕作は言葉を勉強をした。二年間勉強した二人はあることに気づいた、ここはアメリカでは

なく火星のトースターという場所ということに、二人は二年前、あの光と共に火星のトースターに飛ばされた。耕作と拓一は、この星で謎の円盤についていろいろ調べ、長い年月をかけて、自分たちで作った。二人はやっと上富良野に帰れると思ったが、飛行に失敗して、円盤が壊れてしまった。そこにあの時の円盤がやってきて、上富良野まで飛ばしてくれた。上富良野に帰ってきて、二人が見た光景は大きな建物が建っていた。ここは二四〇〇年だった。あの円盤の正体はユーフォーというものだった。

耕作と節子が見つないだ命

(ペンネーム) りくうううう



耕作と節子は上富良野復興して四年後二人の愛は結ばれ、結婚して子供を授かったその子供の名は秀作と名付けました。

その秀作は、頭もよく運動神経良いうえに性格も良かった。しかし、体が弱くすぐ病気になる体でした。ですが、秀作は負けませんでした。なぜなら、父の耕作や伯父の拓一は泥流による被害から上富良野復興という今の私たちに つないだ命を忘れなかったからでした。そういう考えを持っていた秀作は「僕も命をつなぎたい」という気持ちを書き、将来の夢はお医者さんになることと決めました。

そこから秀作はいつも以上に勉強をし、有名な大学に行き、立派な医者となり、上富良野の人たちの沢山の病気を治していききました。

主要登場人物について

(ペンネーム) みつたん



わたしは主要登場人物の性格について考えてみました。

まず、耕作の性格について考えてみました。耕作は、優しく、謙虚だと思いました。理由は、富の結婚のために、中学校をあきらめたり、家族のことを気遣ったり、とても優しいと思ったからです。しかし、噴火したときには、福子を助けるなど、勇敢なところもあると思いました。

次に、拓一の性格は、とても勇敢で一途だと思いました。理由は、噴火したときに、家族を助けるため、泥流に飛び込んでいくところや、復興すると決め、一生懸命頑張っているところが勇敢だと感じたからです。福子にずっと一途なところも素敵だと思いました。

次に、福子の性格は、優しく、静かだけど、とても我慢強い性格だと思いました。理由は、お父さんに売られても、一生懸命頑張り、死にたいと思っても、生きて働き続けているからです。売られていても、常に他の人を気にかけていて、優しく感じました。

次に、節子の性格は、一途で、とても積極的だと思いました。理由は、ずっと耕作に好意を持っていて、その好意を耕作に沢山伝えている描写が多いと感じたからです。鈍感な耕作に何回も愛を伝えていてすごいと感じました。

このように泥流地帯のキャラクターはさまざまな性格のキャラクターが多いことが分かりました。三浦綾子さんの愛が詰まったキャラクター達だと感じました。



春永睦月 Harunaga Mutsuki

@HarunagaMutsuki

泥流地帯・続泥流地帯に「はじめて出逢った」のは、北海道新聞日曜版の連載だった。当時私は小学校三年生。壮大な作品の意味も意義も分からず、それでもふりがなを頼りに新聞の文面に引き込まれていた。「私の祖父も開拓農民。こうだったのか」と思いながら。

【X(旧ツイッター)】

多くのユーザーに利用される SNS (ソーシャルネットワークサービス) のひとつで、140文字以内の短文(つぶやき=ポスト)投稿による高い拡散性が特徴です。

『泥流地帯』作文コンクールではこの機能(アプリ)を利用した投稿も審査対象として募集しています。



りよーこ

@Marimo625

会社で旅行に行かれた方のお土産を頂く。それを見て「我が家は長い間家族旅行してないな」と考えた。確か、富良野は…行ったよな…ラベンダー畑。そんな時、私の名前を呼ぶ声が聞こえる。返事しながらお土産をしまい、声のする方へ向かう。今日の仕事はまだ続く。



神楽岡マイ

@mai_kaguraoka

私がばんえい競馬の馬主になったなら、最初の持ち馬の名前は「アオ」にしたい



橋宮香也子

(三浦綾子『果て遠き丘』)

@KayakoHashimiya

『果て遠き丘』『泥流地帯』連載開始 50 年まであと 3 年。映画「泥流地帯」との同時上映はあきらめないわ！



全日本 infj 協会(仮)

@infj_oneself

「泥流地帯」の醍醐味は感動だけじゃないんだよな。イケメン女子にくっついて息ぐるしいほどどぎまぎしたり、自分への好意をとことんわからず泣かせたりする耕作を、ニヤニヤ眺めるラブコメ要素にもあると思う。しかし耕作……お前、羨ましいぞ！！



Tomomo

@tomomo_journal

【一度きり】

陽傾きし道を上った先に、褪せ欠けの小さな墓石見付く。
「もうこれは誰だか分からない」とおじ白花を手向け呟けば、合掌し皆が「せやね」と口揃え。
さなか、泥流より削られ永久に草木生えぬ茶の山肌目に入り、
(生きたんや。あんたらも生きるんやに)と空間こゆ。



ちょっとおバカな哲学者

@darkish_chclt

誰にも見えない所でも、真

心込めて生きること。
わかってもらわなくても、することだけはきちんとすること。
人生において、簡単に見えてもなかなかできないことの数々。それをこの本は、誰にでもわかりやすく、優しく教えてくれる。
読もう、泥流地帯。
きっとあなたの宝になる。

資料編 史実としての『泥流地帯』

「上富良野村、壊滅ス」

“二度の開拓”を果たした奇跡の町・上富良野の

壮絶な実話から生まれた『泥流地帯』『続泥流地帯』

小説『泥流地帯』が誕生したのは作者三浦綾子さんの夫であり口述筆記のパートナーである光世さんがきっかけでした。三浦夫妻の住む旭川と上富良野は一時間足らずの距離。近郊での出来事でもあり営林署勤務時代から関心の高かった十勝岳噴火災害について、聖書に記されるヨブ記になぞらえ、人間の苦難をどう受け止めるべきかをテーマとした作品の執筆を綾子さんに勧めたそうです。



「泥流地帯」文学碑(草分地区)と三浦夫妻

執筆にあたり三浦夫妻は「悲劇と奇跡の地」上富良野町(被災当時は上富良野村)を幾度も訪れ、災禍の痕跡を巡り当事者から熱心に話を聞きました。執念ともいえる取材の果てに作品に織り込まれた現実の「上富良野」と「十勝岳噴火災害」についてご紹介します。

■上富良野町(上富良野村)

上富良野町は北海道中部、十勝岳をはじめ三方を山々に囲まれた盆地に位置する人口約一万人の町です。

入植開始は明治三十年。三重県の団体が草分地区(物語中、吉田村長や移転後の石村家があった地域)に足を踏み入れたことが始まりです。



初夏を彩る町花ラベンダー、盆地特有の寒暖差で甘みが増したメロン、ビール原料となるホップと大麦、全国のホテルやレストランで愛されるブランドポークや和牛などの豊かな農畜産物、そして道内最高標高、雲上の温泉郷や色鮮やかなパッチワーク丘陵など、広大な火山帯特有の、大自然の恵み豊かな地域です。

■活火山、十勝岳

十勝岳(上富良野町ほか／二〇七七m)は大雪山国立公園南部、十勝連峰の主峰です。日本百名山に名を連ねる秀峰であり、富良野岳、上富良野岳、美瑛岳などを巡る登山コースは多くの登山客で賑わいます。連峰ではもとも若い(新しい)山ですが、現在も数十年おきに火山活動がみられる活火山です。

■大正噴火(大正十五／1926年)

豊かな恵みを楽しむ一方で、大自然は時として人知を超えた脅威をももたらします。

物語の題材となったのは大正十五年五月二十四日夕方に起きた十勝岳の大規模な爆発です。山体崩壊とともに溶岩や熱せられた大量の地下水などが噴出し積雪を融かし、土砂や流木を呑み込みながら泥流となつて麓の村を襲いました。



大正15年9月爆発時の噴煙





【写真①】 泥流に押し流された巨岩(草分地区)



【写真②】 捻じ曲げられた線路(草分地区)

泥流の威力は凄まじく、七十トンに迫る巨岩が旧石村家(があったときれる場所)よりやや下流まで流されました【写真①】。現在この巨岩は記念碑の土台として爆発記念駐車公園に設置されています。
さらに泥流の威力を象徴するのが捻じ曲げられた線路です【写真②】。作中にもあるとおり線路の土盛りはひとときわ高く、泥流の勢いを大きく弱めたとされています。

鉄路の損壊は著しいものでしたが復旧の勢いも凄まじく、被災翌日から数百人の工夫が動員され、四日後には貨客を満載した列車が仮運行されました。これにより各地から支援物資や救援隊が押し寄せ、応急処置のみならず復興の動きが大きく加速します。

また、作中で描かれるとおり田畑の復興作業は困難を極めました。1メートルを超える泥土に埋まったかつての美田の復興には、近隣の丘や被災を逃れた農地から土を運搬し、上に敷き詰める「客土」という方法がとられました。さらに強い酸性の土地を中和し作物が芽吹く土に改良するための作業

が何年も続けられ、ついに耕作が「死んでいる」と嘆いた泥海に再び青々とした稲を根付かせることに成功しました。
現在の上富良野の、豊穡な稔りと風光明媚な景観は拓一や耕作が思い描いた「百年後のふるさと」そのものです。

■石にかじりついても

上富良野村長 吉田貞次郎

物語に登場する吉田貞次郎村長は実在の人物であり、拓一や耕作らとの会話などを除き、作中では実際の言動や自身を巡る出来事などがリアルに記されています。



吉田貞次郎村長

吉田村長は三重県一身田村(現津市)に生まれ、十六歳で家族とともに北海道に渡りました。二十五歳から村議会議員などを歴任し、大正八年、三十四歳で初代村長(一級町村制)に就任し、四期十六年に亘り近隣に名を轟かせる名村長として村政をけん引しました。

奇跡と称される泥流災害からの復興を果たした後、昭和十七年の衆議院議員総選挙で初当選。衆議院議員を一期務め、昭和二十三年、六十三年の生涯を閉じました。

〈参考文献〉

『十勝岳噴火泥流災害90年回顧誌』『郷土をさぐる (第三号、二十号)』(上富良野町郷土をさぐる会)ほか



泥流地帯ギャラリー 【泥海から自転車を引き上げる被災者】

写っているのは上富良野市街で左官業を営んでいた藤森源蔵氏。吉田村長宅の造作に訪れた際に泥流が発生。藤森さんは吉田村長の幼い娘・ていさんを背負い、押し寄せる泥流から走って逃げました。非常に印象的なこの写真は避難の際に置いて逃げた自分の自転車を泥海の中から見つけ出し、引き上げようとする様子を撮影したものです。

※上富良野町郷土館所蔵写真に AI によるデジタル彩色処理を行っています

第4回『泥流地帯』作文コンクール作品集

2024年3月発行

発行：『泥流地帯』映画化を進める会

事務局 北海道空知郡上富良野町大町 2-2-11

上富良野町企画商工観光課内